

---

# Chain

ルナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Chain

### 【コード】

N0449E

### 【作者名】

ルナ

### 【あらすじ】

平穏だった生活にとんでもない変化が！？魔法と絆の学園ストーリー！最後に待ち受ける結末とは！？

## 序章 1話

〔序章〕

### 1話

びしゃり

踏みだした足は水音を響かせながら一歩ずつ前へと進んでいく。足取りは軽いようで重い。体は昂揚感に包まれているようでなぜか気がだるい。

びしゃり

暗い廊下をさらに進む。もうこの建物には用はない。今回も収穫はなかった。いったいいつになったらこの負の感情の連鎖に終わりがくるのだろうか？その問いに答えるものは誰もいない。そこには生きているものが誰もいないのだから。

びしゃり

水音が廊下の壁に反響する。そういえばなんで廊下に水が流れてい  
るんだらう？水漏れでもしているのだらうか？どこか焦点の合わない目で周りを見渡してみる。その眼からは生気は感じられず、さながら機械のようだった。

びしゃり

ああ、なんだ。その原因をつかみ独り納得する。そしてそのまま視線を自分の右手に持っていく。そこに握られているのは切っ先が濡れた短刀。明かりのない廊下では、その色は判別はできないが、すでにその色が何色かはわかっている。

びしゃり

廊下に横たわるたくさんの影。どれを見てもピクリとも動く気配はない。いや、ひとつだけ動いているものがある。その影から流れ出る何か。それは廊下に水たまりを作り、先ほどの水音の原因となっている。

びしゃり

わずかに廊下に光が入る。雲が切れたのか、月の光が廊下の様子を映し出す。そしてその影の正体を浮かび上がらせる。

びしゃり

横たわるは死体。どれも切り裂かれ、無残にその傷口から鮮血を流す物言わぬ肉塊。月明かりに照らされたそれを見下ろす。どの影も脆かった。人数をかければどうにかできると思ったのであるうか？それとも本当に何も考えてはいなかっただろうか？

びしゃり

思考を停止する。そんなものは考えるだけ無駄なことだ。どうせさつきまで記憶の片隅に追いやられていたのだ、どうでもいい。今は早くここを出ることを考えよう。

ぴしゃり

それでも足は速くは進まない。まるで一秒でも長くそこにとどまろうとするかのように。一步一步規則正しくまるで機械のように進んでいく。

ぴしゃり

少しの間だけ切れていた雲がまたふさがり、あたりを漆黒の闇で覆い隠す。その間際、最後に月光が照らしたのは、返り血に真っ赤に染まった無表情な一人の少年だった。

p i p i p i p i p i

無機質な電子音が部屋の中に鳴り響く。寝起きの働かない頭とは別に、習慣によって培われた反射がその音の発生源である目覚ましに手を伸ばす。再び訪れる静寂。うつすらと目を開けてみると、カーテンの隙間から光が漏れている。どうやらもう朝らしい。あまり思い出したくもない夢を見たせいで、早めに寝たはずなのに疲れが取れた気がしない。むしろ悪化しているような気さえする。なんだから今日に限ってあんな夢を見たのだろうか？ いや、やめよう。それよりもとっと起きて顔でも洗ったほうが建設的というものだ。ベッドからのっそりと這い出し、洗面所に向かう。鏡に映る自分の顔は、夢を思い出してしまふような無表情なものだった。

コーヒーの香りが狭いワンルームの部屋の中に漂う。軽く焦げ目のついたトーストにチョコクリームを塗りたくり、口へと放り込む。テレビから流れるニュースはいつもとさして変わらない。どこでこ

んな事件があったとか株価がどうかそんなものばかり。それをどこか機械的に眺める自分。ブラウン管にわずかに反射するその顔を見て、またさっきの夢を思い出す。

やめよう、もう終わったことだ。

自分に言い聞かせるようにそつつぶやく。それを早く頭の中から追い出してしまいたくて、何か気を紛らわせることができるような何かを探す。

ふと視界に入る白い大きな封筒。それを手に取り眺める。

『八雲 鏡夜様』

宛名に書かれた自分の名前。そして封筒の下の部分に書かれた大きな文字。

『私立月影学園』

封筒の中からその先頭にあった紙を一枚取り出す。大きく書かれた合格の文字。その文字を見ると、不思議と顔に笑みが浮かんできていた。

ただの合格通知書。それが俺にとっては無性にうれしかった。これから3年間、自分が通うところになる高校への入学許可証。ようやく手に入れた、普通の生活への第一歩。

人には大なり小なり過去がある。それがいいものであれば悪いものもあるだろう。そんな中でもとりわけ自分の過去は悪かったと思う。気がつけば一人だった。いつの間にか人形のようになっていた。

『前を見なさい』

そんな俺にかけられた言葉。厳しいようで、やさしい声。

『あなたはまだ始まったばかりよ』

その言葉で立ち上がった気がした。俺という存在はそこから始まった気がした。だから歩く。自分の足で。その言葉を信じて。

そしてたどり着いた場所。今日、俺は月影学園に入学する。

入学式なるものは滞りなく進行していた。何度も行われる起立と着席。長つたらしい話。周りがどこか気の抜けたような、退屈そうな表情をする中、俺の心は浮足立っていた。今まで自分がいた世界とはまるで違う空気。穏やかで、ゆったりと流れる時間。そのどれもが今の自分を刺激してくれていた。期待はさらに高まるばかり。こんな感情ははじめてだった。

式のプログラムもそのほとんどが消化され、残すところは連絡事項と書かれた項目のみになっていた。最初から一字一句聞き漏らすまいと集中していたせいか、正直少し疲れてきた。だが、もう後10分もすればそれも終わり。最後まで集中を保つべく自分に気合を入れなおす。

「入学式の終了後は、各自、簡易的な適正検査を受けてもらうことになっていきます。これはそれぞれの魔術特性を判別するためのものなので、全員確実に受けてください」

何だって？

「この研鑽はこれから3年間、この月影学園で生活する上で一番重要なことです。自分の魔術特性を知らなければ魔術を学ぶことはできません」

繰り返される魔術という単語。もちろんその意味を知らないわけでも、ましてその内容がわからないわけでもない。だがそれはあくまで知識としての話だ。しかし今、確かに壇上の女教諭は魔術というものを当たり前のように話している。しかもそれがこの学園でもっとも重要なものとまで言っている。意味がわからない。理解ができない。あれは自分の聞き間違いに違いない。きっと今日は集中しすぎて疲れたのだ。だから、そんなありえないことを聞いてしまったのだ。そう自分に言い聞かせる。

壇上の女教諭はまだ何かを話しているが聞かなければと思っっているのに、なぜか言葉が耳に入っていない。ふと、周りを見回している。明らかに動揺している自分以外のやつの反応が見たかったからだ。もちろん何らかの反応をしていると思った。自分と同じく動揺していたり、はたまた何のつもりだと、怒っているものとはかり思っただのだ。

どうなってるんだ？

しかしその期待を裏切るかのように周りの人間、いや、この場にいる人間すべてが今の言葉に対して何の違和感も抱いてはいない。すべては言いすぎかもしれない。大多数に埋もれて自分と同じ状態の人が見えないだけかもしれないが、少なくとも9割以上はいたって普通だ。むしろその眼を輝かせ、壇上の女教諭の言葉に熱心に耳を傾けているようにさえ見える。



こんなことはありえない。

脳内でそう必死に思い込んでみるが、周りが何も言わない以上、自分だけが行動を起こすのもためらわれる。個人というのは集団という枠組みの中では微々たる力しかもたない。例外はあるがそれが自然の摂理だ。

こういうときはどうすればいい？答えは簡単だ。まずは落ち着け、そして冷静に思考を開始しろ。過去に培った経験がこんな状況で生かされるとは思わなかったが、今はそれが幸いした。そのおかげで無様に取り乱すことをさけられたのだから。

考える。このおかしな状況についてひたすら考える。そこでたどり着いた一つの答え。それはとりあえず周りに合わせるといって、逃げの一手だった。

結局、周りに合わせるつもりだった俺は、気付けばあの場から逃げ出していた。入学式の後は適性検査とやらをすると言っていたが、俺はそれを受けることなく学校から逃げ出したのだ。魔術という単語を聞き、周囲の人間の違和感に気付き、俺はおかしいくらい動揺した。こんなにも動揺したのは初めてだった。あのとときだってこんなにも動揺はしなかったのに。

扉を開け家の中に入る。朝、この扉を開けた時の期待に満ちた感情は、今はもうどこか遠くへ行ってしまった。着ていた制服を脱ぐこともなくベッドに倒れこむ。まだおろしたての制服は固く、そのまま着ているのは居心地が悪くはあったが、今は着替える気はなれなかった。そしてそのまま俺の意識は闇へと落ちて行った。

## 序章 2話

（序章）

### 2話

暗い廊下を歩いている。足元に転がる無数の死体を見ても何も感じない。感情という機能はなく、ただ命令に従い動く人形。

それが自分の存在意義。

暗がりの奥で物音が聞こえる。そこにいたのは小さな女の子。その瞳は涙にぬれ、俺を見ると恐怖で顔が引きつり、必死で助けを求め

る。だが俺に与えられた命令は皆殺し。そこに例外はない。何の迷いもなく手に持つナイフを振りかざす。何のことはない、また廊下に静けさが戻る。

何も感じない。自分は人ではない。

そこにいるのはただの殺人人形。

闇に落ちていた感覚が戻ってくる。どうにも深い眠りだったらしく、頭がぼんやりしている。時計を見ると時刻は午前5時になったばかり。どうやら昨日、帰宅してベッドに倒れこんでから今までず

つと目覚めなかつたようだ。昨日おろしたばかりの制服が、すでにくしゃくしゃになってしまっている。着替えずに寝てしまったのだからそうなるのは当然か。

まだ半分寝ている頭を起こすためにシャワーを浴びることにする。次第にしっかりと働き始める脳。続いて思い出すさつきまでの夢。

二日連続で見ることになるなんてな。

原因は言わずもがな、昨日のことだろう。魔術などという学校の、しかも教師からの説明。新たな生活への期待を裏切られたことへの混乱が、どこかしらストレスになり、それが夢の中へ悪い方向で現れたに違いない。

ずいぶんゆっくりと準備をしたにも関わらず、時刻は未だ7時を回ったばかり。家から学校までの距離はたいしたことはなく、10分もあれば到着する。ゆえにまだ家を出るにはそれなりに時間がある。正直な話、あまり行きたくはない。昨日、何の確認もせずに戻ってきた後ろめたさもあるが、何よりあの学校が普通ではないのが一番の問題だ。

普通を望んだ結果がこれか。

なんとなく自分は不幸な星の下に生まれたのではないかと思えてくる。何しても準備をしなくてはならない。まだあの学校がおかしいと決まったわけではない。昨日のことは何かしらのジョークなのかもしれないし、今日行ってみれば、実は何事もなかったかのように授業が行われるのかもしれない。

むしろそれを望む。変なことは何もいらぬ。ごくごく一般で十分なのだから。

それでも最低限のものは持っていくことにする。いかに自分が望ん

だところで、結果は違つかもしれない。魔術なんてものを本当に信じ込んだいわゆる宗教団体みたいなものなのもかもしれない。だから準備は怠らない。そこに待つものが普通だと信じて。

「これより昨日の選定の結果を発表します。この結果によりみなさんの魔術訓練のクラスが決まることになりますので、しっかりと確認するようにしてください」

望みは一瞬で砕け散った。教室に入った段階では、そこはごくごく普通の教室だったので少し安心もしていたのだが、チャイムが鳴り、入ってきた女教諭のその発言でその安心は脆くも崩れ去ってしまったのだ。

「昨日も言いましたが、これはきわめて重要なことです」

よく見てみればその女教諭は、昨日壇上で魔術についてあれこれ述べていた人物と同じだった。肩より少し長めのまつすくな黒髪に、切れ込みを入れたかのような鋭く、それでいて綺麗な目。そこにかけられた眼鏡が、どこか一流企業の社長秘書を連想させる。スーツをきっちり着こなすその様子は、非の打ちどころがなかった。

まさに美人。

少し周りを見渡してみれば、クラスの男の大半は熱っぽい視線を教師に送っていた。

「その前に一応私の自己紹介をしておきます。これから一年あなた方の担任になります神崎要です。よろしくお願いします」

神崎教諭はそれだけ言うで一礼だけし、それ以上自分のことについて何かを語ろうとはしなかった。なんとなくその事務的な様子が、彼女の雰囲気を感じて人と認識付けたのか、誰も何かを質問しようとはしない。教室は静寂に包まれている。

「それでは今から個別の資料を配布します。これからの時間割、並びに連絡事項などはそこにすべて書いてありますので」

神崎教諭の手には書類の束が握られている。どうやらそれが今言ったものらしい。もっとも昨日その選定とやらを退避した俺のものは入っていないだろう。だからと言ってそれが残念などは微塵も思わない。それよりも今考えるべきことは別にある。一体自分はどんな場所に迷い込んでしまったのか。少なくとも外観はまったくの普通の高校だったはずだ。入学試験にしても、一般的に行われているようなテストと面接。そのどこにも入学後にこんな状況になるような要因はなかったはずだ。

神崎教諭はすでに資料を配り始めている。それを受け取る生徒は、だれを見ても自分のような疑問を抱いているものはいないようで、期待に満ちた表情をしている。つまり誰一人としてこの状況を問題とは感じていない。

どうしたものか？

判断はつかない。期待していた高校生活を最初から壊されたせい、今の感情は怒りというよりもむしる落胆のほうが強かった。ようやく手に入れたと思った普通が崩れていく。そのときだった。今まで興奮に満ちていながらも、保たれていた静寂が破られる。

「いい加減にしなさいよ！！」

怒りに満ちた声が教室に響く。

「さつきから魔術だかなんだか知らないけど、あんた本気で言うてるわけ!？」

声の主は全員目が集まる。軽くウェーブのかかった茶色っぽい髪。その大きな目は今は怒りでつりあがっている。神崎教諭とはまた違った美人なのだが、今は般若も逃げ出したような表情だ。まさに怒髪天をつくといったところだろうか。

「どこの高校に魔術を教える教師がいるのよ!!!というか馬鹿じゃないの!!!」

決して小柄ではないが大柄でもない彼女なのだが、あまりにもすさまじい怒りのせいか、その威圧感のせいでとても大きく見える。

そんな彼女の怒声に、どこか安堵していた自分がいた。少なくとも彼女のおかげで同じ思考をもった仲間がいることがわかったのだ。こういう状況でのその一人は何よりも大きい。

「彼女と同じ意見の方はいますか？」

しかし、怒りをぶつけられた本人である神崎教諭はといえば、その表情を崩すわけでもなく、さつきまでと変わらないトーンで他の生徒へ確認をとる。どんなに注意して見ても、その顔からは何の感情も読み取ることはいできない。

「いませんか？」

再度神崎教諭はどう問う。もちろん彼女に賛同するものは皆無。そ

それはそうなのだろう。教室内の様子を見る限り、彼女のことを疑問視しているものはたくさんいるが、決して理解をしているように見える人間は誰もいない。そんなことはさっき自分自身で結論づけたことでもある。だからと言って彼女がそれで納得するわけがない。その眼はますます厳しくなり、それこそ怒りで光っているようにも見える。視線で人が殺せるのなら、全員すでに何回殺されているだろう？現に、彼女の周りの生徒はその怒りに気圧されて小さく縮こまってしまっている。

「うそでしょう！？まさか誰もいないわけ？！」

彼女の表情に若干焦りのようなものが見え始めた。どんなに自分が正しいと思っても、大多数の相違意見が自分の意見を上回れば、人は自分を信じるのが難しくなる。集団心理なぞそんなものだ。例にもれず、今の彼女もそういった感じなのだろう。

何にしてもこれ以上黙っていてもしょうがない。何が正しいのかわからなくなっているこの状況をどうにかしたいなら、行動するのが一番だろう。きっかけは彼女がつくってくれているのだから。

「俺も彼女の言う通りだと思っ」

静かに席を立つ。さっきまで彼女に向けられていた視線が、今度は自分に集まってくる。どの目も、やはり言っていることが理解できないといった感じだ。

「魔術なんてものはこの世にはない。宗教活動がしたけりやよそでやれ」

魔術なんてものは存在しない。そんなものはありえない。仮に存在

したとして、それが一般によく想像されるようなものだとしたら、とつくにこの世はおかしくなっている。すべての物理法則は崩壊し、それこそ世界のバランスが崩れる。だがそんなことは起こっていない。証明材料はそれだけで十分だ。

彼女のほづをちらりと横目で盗み見る。自分の意見に同意してくれたものがいた安心感からだろう、少しだけ怒りが薄らいだような気がした。

「三枝さんと八雲さんですね」

神崎教諭はクラス名簿と思わしきものに目を通し、俺たち二人に目を向ける。やはりその眼に何の感情をも読み取れないのは変わらぬ。八雲は自分の名字だから、彼女の名字はどうやら三枝というらしい。

「少し席をはずしますので皆さんはこのまま教室で待機しててください。すぐに代わりの者を呼びます。それからお二人は、」

教卓の前から教室前方の扉に移動する神崎教諭。

「私についてきてください」

扉を開ける。今まで張りつめていた教室の空気があいた扉から抜けていくような錯覚を覚える。

しかしどういっつもりだろう。あからさまに怪しんでいる人間がついてこいといったところで、それにはいそいですか、と応じる人間がいるとも思っているのだろうか。少なくとも自分はそんなことはしたくない。あまりにもリスクが高い。

「いいわ！あんなたちの化けの皮はがしてあげるんだから！！」



盛大にずっこけそうになった。

言うが早いか、三枝は机を倒さんばかりの勢いで神崎教諭が開けた扉に突撃していく。さながら闘牛士に向かっていく牛のようだ。

「何してんのよ！！あんたも早く来なさい！！」

呆けて立っている俺に向かってそう怒鳴る三枝。一体あいつは何を考えているのだろう。どう考えても危険なことに自ら飛び込もうとしている自覚はあるのだろうか。いや、そこまで深くは考えていないのだろう。今三枝が考えていることは一つだけ。魔術など言っているこいつらに、そんなものはないと認めさせることだけ。

なぜ上から目線なのかは、この際置いておくとしよう。

「どうしました？」

静かに問う神崎教諭。さっきまで何の感情もなかったその眼に、今はどこか挑発めいたものが見えた気がした。体はさきから警鐘を鳴らさなければならぬ。一刻も早くこの場を離れるべきだということはわかっていて。それでも、今自分が一人で逃げれば三枝はどうなるだろうか。関係ないと言えばそれまでだが、何かあっては目覚めが悪い。それに、

『前を見なさい』

あの約束。

『あなたが正しいと思ったことをすればいい』

片時も忘れたことのない言葉。

ゆっくりと席を立つ。おもむろにポケットの中を探る。固い感触。最低限のものを準備してきて本当によかったと思う。

仕方がない。ここまで来たら付き合うことにしよう。

そう決意を固め、三枝の後を追った。

## 序章 3話

〔序章〕

### 3話

薄暗い廊下。まだ真昼間で、尚且つここは学校の中のはずなのだが、なぜかそんな感じは微塵も感じられない。タイルが敷き詰められるという一般的な廊下ではなく、この廊下はどういうわけか大理石が敷き詰められている。両側の壁には窓はなく、そのかわりに絵画が一定の間隔をあけて飾られていた。学校の廊下をを歩くと、よりも、どこか監獄を歩いていると言ったほうが今の感覚に近いかもしれない。

しかしだ。今の俺にとってはそれよりも重大な問題がある。こんな雰囲気など取るに足らないもっと大きな問題だ。

「ちょっと！どこに行くつもりなのよ!？」

「もう少しですからそう騒がないでください」

隣を歩く三枝から放たれるこれでもかと言わんばかりの不機嫌オーラ。近くに猫とか鳥とかがいたら、きつと一瞬で逃げていくに違いない。神崎教諭の言葉にとりあえず黙る三枝だが、その表情を見る限りまったく納得した様子はない。現にさっきから、

いつまで歩かせんのよ

とか

絶対化けの皮を剥いで、その顔一発ぶん殴ってやるんだから

とか

その他にもいろいろつぶやいてくれている。おかげでこっちは退屈しなくてすんでいる。もちろん悪い意味で。

「ねえ、あんたはどう思うっ?」

「ん?」

「だからこの学校についてどう思うかって聞いているのよ」

いきなり三枝が話しかけてくるものだから対応が遅れてしまった。ご立腹なのは相変わらずだが、やはり少し不安なのだろう。俺に向ける表情に、少しだけその様子が感じ取れる。

「少なくともまともなところじゃないってことは確かだろうっさ」

「そうよね!! あんたもそう思うわよね!!」

一緒についてきてる時点で俺が魔術など信じてないのは明白なのが、やはり直に言葉で聞くのはまた違うのだろう。目に見えて三枝の表情には覇気があふれてきている。一瞬までの不安そうな表情はどこにいったのやらだ。

「自己紹介がまだだったわね。私は三枝凜。あんたは?」

「八雲鏡夜だ」

「ふうん、なんだか珍しい名前ね。まあいいわ。とりあえず鏡夜って呼ぶことにするから」

「好きにしる」

いきなり名前でしかも呼び捨てなのには突っ込まないでおく。この短い時間で俺は三枝の性格を少しだけだが理解していた。そこから導き出された結論は、

『実害がないのならこいつの好きにさせておけ』

要するに、触らぬ神にたたりなしってことだ。こいつの怒りのベクトルがこっちに向くことはできれば避けておきたい。どう考えても処理がめんどくさそうだからな。

さっきまで俺の一步前を歩いていた三枝、いつの間にか隣を歩いていた。お互いに自己紹介をしたこととか、それとも味方ができたからか、三枝の中では俺に対して信頼のようなものができたのだろう。

「この部屋です」

結局、15分ほど歩いたところでようやく目的地に到着した。連れてこられたのはやたらと大きな扉の前。まさかとは思いがここに入れと言いつもりだろうか。扉に仕掛けがあるようにはみえないが、出来ることならあまり入りたくはない。

「ここに何があるっていわけ？」

「それは中で説明します。廊下でする話でもないですので」

そう言い、神崎教諭は俺たちを中へ促す。だが、俺も三枝もそこから動かない。

「何も恐れるものなど用意はしていません。ただあなた方に魔術というものを理解していただくためにはこの部屋が適任なのです」

魔術。先ほどから何度も聞く単語。それは現実にはありえない空想上の産物。いうなれば子供心が生み出した幻想とでも言うべきか。たとえどう置き換えたとしても決して現実世界にはありえない現象。だが神崎教諭はそれが実在するという。神崎教諭だけではない。この学校にいる、俺と三枝以外の人間は全員それを肯定しているらしい。それこそ非現実的。まぎれもない幻想。

「なんなら誓いでもたてますか？あなた方に危害は決して加えないと」

そんな幻想も大衆が是と言えば現実になる。宗教あたりがいい例だろう。科学的に考えて何の根拠もない、その宗教に属していなければ鼻で笑ってもおかしくはない教え。だが、人はそれを信じる。それを信じ、敬い、恐れ、信仰する。それは大衆が是と言うから。なら今の状況はどうだ？魔術など実際には決してありえないことだが、学校と言う大衆がそれを是と言う。ゆえにここではそれが現実となり、それを否とするものが非現実となっている。

ポケットの中を再度探る。

それでも俺はその現実を受け入れる気はない。受け入れては何のために普通を求めたのかわからない。

「怖いのですか？」

怖いさ。ようやく手に入れたものを壊されようとしているのだから。

「怖いわけないでしょう!?!」

突如として隣からあがる怒声。それが誰かを確認するまでもない。

「いいわよ!!入ってやろうじゃないの!?!」

三枝の言葉に神崎教諭はその扉をに手をかける。ゆっくりと開かれていく扉。何か見えないかと覗き込んで見るが、中は薄暗くいまいち何があるのを確認することはできない。

人が二人通れるところまで扉は開いて止まった。まず最初に神崎教諭が、それに続いて三枝も部屋の中に歩を進める。俺はそこから動かない。いや、動きたくない。

「早く来なさいよ!?!」

動かない俺を見て怒鳴る三枝。一体あいつはどういうつもりでそんな簡単に自分の行動を決めているのだろうか。あの部屋の中にはどんなリスクが待っているかわからない。いや、俺が恐れているのはそんなことではないのだけれど。

それでも三枝は部屋へはいる。俺は動くことも出来なければ何かを言うこともできない。

どうしたらいい?

入りたくはない。入りたくはないが、ここで逃げ出すわけにもいかんだろう。自分一人ならまだしも三枝がいる。もしあの中にあるのがやっぱり罠で俺が逃げ出したらあいつはどうなる?

頭の中で何かがささやく。

今更気にすることじゃないだろう？

確かに今更だ。自分の過去を鑑みれば偽善もいいところだ。

何をためらうことがある？

逃げだせばいい。今なら遅くはない、まだ普通に帰れる。

そつだ逃げろ

今進んできた道を戻ればいいだけ。たつたそれだけのはずなのに俺の脚は動こうとはしない。脳から信号は送られているはずなのに動かない、まるで根が生えたかのように、石にでもなってしまったかのように。そしてまた声がささやく。だが今度の声は今までとは違った。

逃げるなよ

今まで言っていたこととは真逆のことを言う。

逃げるな

そんな何のメリットもない言葉、だが強い響き、足がようやく動いた。扉に向けて歩き出す。ためらうことはない。さっきまでの迷いはもう消えていた。



## 序章 4話

（序章）

### 4話

その部屋は不思議だった。窓もなければ装飾品も何もない。ただ部屋の中央に机が一つ置かれているだけの部屋。それはどの国の様式にも見えるが、どれにも属さない。自然に見えるが不自然に見える。通常、部屋と言うのは一見すればその使われ方がわかる。理科室ならば実験器具が、調理室なら調理器具が、普通の教室なら机や机が、だが、その部屋からはそれらが何も感じられない。唯一感じられるものがあるとするとその不気味さか。

「何この部屋……」

先に部屋に入っていた三枝も同じことを感じていたらしい。おそらくおれは独り言だったのだろうが、俺の耳には若干恐怖のようなものが混じったその声がしつかりと聞こえていた。本当になにもない部屋だ。正直もっと奇妙奇天烈なものがあつた方がまだよかつたと思う。その方がまだリアクションがとりやすい。

「この部屋は覚醒の間と呼ばれていて、数年に一度この時期にのみ使用される部屋です」

「なんでこの時期だけなのよ？」

他にも突っ込み入れるところはたくさんあるだろうに、あえてそこ

に突っ込みを入れるあたりが三枝と言う人間なのだろうか。

「簡単に言えばあなた方のような人のためにある部屋と言ったほうがいいですね」

「どういう意味よそれ？」

「この部屋の使用用途は魔術師の潜在能力の覚醒です。魔術とは素質だけではなく、使用者の認識が鍵となります。通常、ここに入学する生徒は過去に何らかの形で魔術にふれたことがありますが、中にはあなた方のように何も知らず、魔術を信じることもなく入学してくる人もいます」

つまるところ、魔術を信じないものを信じさせるのがこの部屋というところらしい。ここで何が執り行われてその上で何を信じるのかは知らないが、あまりこちらにとっていい話ではなさそうだ。

「もう一度言いますが、魔術の基本は認識です。しかし、あなた方に魔術はありますなんて言っても信じるはずはありません。仮に私がこの場で魔術を披露したところで、ここは私が連れてきた場所であり、何らかのトリックを使ったと言われればそれまで、あなた方は信じる要因にはなりません」

「それだけわかってて尚、俺たちに何を見せるつもりだ？実演でも信じさせられないのにそれ以上のものがあるとは思えないな」

神崎教諭の言ったことは実にその通りだ。仮に前で炎なり雷を起したところで俺は間違いなくトリックの一言で片づけるだろう。しかし神崎教諭はそれがわかっていても表情を崩すことはなく、ただ淡々と言葉を続ける。

「言葉では信じられない、私が実演して見せても信じられない。でしたらあなた方が魔術を行使すれば信じるしかないでしょう」

「それこそ妄言だな。あんたは今、魔術というものは本人の認識の上で成り立つと言った。それなのにその重要なプロセスを否定している俺達にそれをなさずに魔術を行使させると言っている。論理の破綻もいいところだ」

「何か勘違いされているようですね。確かに魔術は認識の上に成り立つとは言いましたが、必ずしも認識をしなければ行使できないとは一言も言ってません」

「詭弁だな」

「ですが真実です」

そう言い切る神崎教諭に俺は次の言葉が見つからない。確かに先ほどの言動の中で認識が重要だとは言っていたが、それがなければ魔術が使えないとは一言も言っていなかった。それに俺には次に神崎教諭は言うことが推測出来てしまう。おそらくはこの部屋が鍵なのだろう。この部屋の中では術者の認識がなくとも魔術が行使できる。だから信じない者はこの部屋で実際に魔術を行使し信じさせる。そんなところだろう。

「この覚醒の間であれば認識がなくとも魔術を行使することができません。もつとも、それは認識をしたものの半分のみも出ませんが、魔術を認めるだけなら十分です」

やはりそれは推測通りだった。そして俺はまたしても神崎教諭に何

か反論を行うことができない。反論すべきところはいくつもあるし、そもそも魔術を否定している俺たちにとって今の話は根本が破綻している。神崎教諭の話は魔術があることを前提としたものであり、俺たちを納得させるにはまったく弱いものなのだ。この話を神崎教諭以外のものがしたのなら、まちがいにいくおれは一笑にふしているところだろう。それくらいばかげた話でなのだ。それなのに何も言えないのはひとえに神崎教諭だから、それ以外に説明のしようがない。

「くだらない……」

「くだらないかどうかはご自分の目で確かめてみてはどうです？ 否定するのはそれからでも遅くはないでしょう」

「またも正論。なんだってこちらがこんなに押されなければならないのか。だが、どうやら動揺をしているのはこの場において俺だけだったらしい。隣にいたもう一人の目がこれでもかというくらい輝いているのにまったく気がついていなかったのだがら。」

「長つたらしい説明はもういいわ！！見せてくれるっていうなら見せてもらおうじゃないのよ！ さ、私は何をしてらいいわけ！？ とりあえずあんたを殴って見たらいいかしら？」

そんなはずあるか。

それでも自分の話に三枝の警戒心が薄れたのを感じ取ったのか、無表情だった神崎教諭の顔にわずかに変化が見られた気がする。それが俺にとっていいものではないのは、もはや言うまでもない。

「こちらへ来てください。この部屋でならあなたにも魔術が使える

と言いましたが、他にもやるべき手順がありますので」

「めんどくさいわね、そんなものどうにかしなさいよ!!」

「安易な魔術の行使は本人はおろか、その空間にも影響を与えることがありますから。それゆえ準備だけはしっかり行うのが魔術というものなんです」

さっきまでこちらサイドだった三枝は、すでに神崎の話に魅入られ暴走状態になってしまっている。そんな中、俺だけがその場から取り残されてしまったようだった。

「まずはこちらに来てください」

「その机に何かあるわけ？まあ、この部屋にあるのはそれだけなんだし、何かあるんじゃないかとは思ってたけど」

そう言いながらも三枝はその机へと歩みよっていく。その様子を見るに、もはや三枝は神崎教諭に対して何の警戒も持っていないようだ。

「おい、お前はもう少し人を疑うってことをしろよ!!どう考えたってそいつの言ってることは怪しすぎるだろうが!!」

「うるさいわよ!私は売られた喧嘩は買う主義なのよ!だいたいさつきから売り言葉に買い言葉で話がちつとも進まないじゃない。だったら魔術でも何でも試した方が時間の有効活用ってmondaw!!」

そんなもののために自分の身を危険にさらすっていうのはどうなんだよ。そう思ってる間に三枝はすでに神崎教諭のいる部屋の中央に

ついでにしまった。そこにあるのはこの部屋にある俺たついで以外の唯一の物でもある机。

「ここに手を手のひらを上に向けてかざしてください」

「この魔方陣みたいなやつの上ってこと？」

「そうです。かざしたらそのままの状態にしておいてください」

魔方陣とはいかにもオカルトの代表的なものが出てきたものだ。信じる気はこれっぽっちもないが、不思議と何か冷たいものを感じる。それは三枝が机の上に手をかざしたことにより、魔術の準備がはじまったのか、それともこの部屋独特の空気に俺が動揺しているのか、できればどちらでもないことを祈りたい。

「それで、この先はどうするわけ？」

「少し失礼します」

そう言うと神崎教諭は机の上にかざしていた三枝の手首をつかんだ。そして三枝の手首をつかむ手の逆の手にはナイフ。俺はもちろんだが、それを見た三枝の驚きは一体どれほどのものだろう。

「ち、ちょっと!?! 一体何する気!?!」

「心配しないでください。すぐ済みますから」

ナイフは三枝の手に向かう。三枝も必死に抵抗しているが、どういいうわけかちつとも動けていない。

油断した。

せめてもう少し近づいておくべきだったのだ。三枝と神崎教諭のいる位置までの距離はおおよそ3メートル、1秒もあれば届く距離。だが、すでにナイフは三枝の手に向かって振りおろされようとしている。どう頑張っても間に合わない。

「ふざけるんじゃないっ!!」

しかしさすが三枝と言ったところだろうか。ナイフが振り下ろされる直前にできたわずかな隙につかまれていない方の拳を神崎教諭にたたきこむ。完璧なタイミング、常人であれば反応はできても回避は困難であろうかという本当に唯一無二のタイミングだった。これが危険を感知した人の本能なのかと思うくらい完璧だった。

必然、その行動により神崎教諭は仮にそれを回避できても動作が1テンポ送れる。それだけあれば距離を詰め、三枝を助けてやることができる、はずだった。

「いい攻撃ですが、できるなら今はやめてください」

確かに神崎教諭は俺から見て前方にいた。だが今聞こえたこえは俺の後方から。そして今まで確かに見ていた場所に二人の姿はなく、そればかりかあの机すらもない。

「少しだけ我慢してください」

振り返ったときにはもう遅かった。三枝の手に襲いかかるナイフ、こぼれる鮮血。その光景はやたらとゆっくりで、まるでスローモーションで見ているような錯覚さえ覚えた。

三枝の血が傷口から机に落ちる。次の瞬間、あたりは光に包まれた



## 序章 5話

（序章）

### 5話

何が起こった？

まだ少し光によってくらんでいる目を必死に働かし状況を確認する。確かあの教師が彼女の手をナイフをで切りつけた。そしてその瞬間すさまじい光が彼女を中心にして発散された。

これが俺が現在理解している全てだ。少しずつ視界がよくなる。はつきりと見えたときに目の前に何があるのかは知らないが、少なくともあの教師が敵だということだけは確かだ。

取り出した秘密兵器を強く握りしめ、目をこらす。次の瞬間目に入ったのは世にも不思議な光景だった。思わず眼科に視力検査に行きたくなるほどにな。

「どうなってやがる」

彼女はさっきの場所に立っている。その様子から無事なのはわかるのだが、

なんだあれは？

まっすぐに伸びた刀身。美しく装飾された柄。彼女が手に持っているのは間違いなく刀だ。

いや、少し違うな。あれは刀というよりは剣といったほうがいいだろう、装飾なんか西洋風な気もするし。もっともそんなものに興味のかけらもない俺としては、あれの正式名称がなんのかわからん。そんなことよりだ。何で急に剣なんか現れたんだ？

「ちょ、ちよつと、何よこれ……」

俺も十分に愕いているのだが、それ以上に驚いているのが彼女だ。というかそれりやそうだろう。自分の手を切られて、いきなり光り始めたと思ったら次の瞬間には手に剣が握られているのだ。これで愕かないのは太古の恐竜くらいだろうよ。大きすぎて神経の伝達が遅かったらしいからな。

「それはあなたの魔力のより生成されたもの。通称、魔具と呼ばれるものです」

「魔具……?」

おいおい、するとなんだ？あれは魔術の一端だともいっのかよ。誰か手品だと言ってくれ。

今ならドッキリ大成功ってことで許してやるから。

「少しは信じる気になりましたか？」

「そうね、少しだけなら……」

頼むから雰囲気流されるのはやめてくれ。

「ならあんたもやってみなさいよ！そうすれば私の気持ちもわかるわよ……!」

それは俺にも手を切れと言っているのか？ごめんだね、血を見るのは好きじゃないんだよ。

「意気地なし」

うるさいよ。唇を突き出して拗ねたような顔をしてもだめだ。というかそういう顔していると可愛いじゃないか、ずっとそうしててくれにしてもだ、ここで新たな可能性が浮上してきた。彼女もこのとんでも展開の仕掛け人なのでは？という疑問だ。

さっきまでは同じ考えの持ち主ということと特に疑いもしなかったが、なぜかあつまりり信じ始めている彼女を見ると、そんな考えもあながち間違いないように思える。

「あんだ、もしかして私のこと疑ってんじゃないでしょうね？」

するどいやつだ。実はエスパーなんじゃないか？

「その顔、やっぱりそうなのね！！」

ああそうだよ。こうなったらやけど、大体なそんなもんをほいほい信じられるわけがないだろうが！！そういう非現実的なことは、とおの昔に燃えるごみと一緒にごみ収集車が持っていったよ。

「だからあんたもやりなさいって言うてるのよ！そうすればわかるから！！」

断るといつているのだ。冗談じゃないね。

「11の〜…!!」

剣を降りあげるなよ、しゃれにやらんだろうがー！

そんな風に俺達が言い争いをしている中、もう一人の当事者といえ  
ば、そんな様子などどこ吹く風。優雅に紅茶を飲んでやがる。  
それどこから出したんだよ。

「心配なさらずとも、選定は血液でなくても出来ます。要は選定を  
受けるもののDNAが含まれているものならいいのです」

「そういうことは先に言え」

それから俺の咽に突きつけている剣をどけてくれ、死んだらどうす  
る気だ。

「私の手元が狂うはずないでしょう？」

その自信はどこから来る？原稿用紙5枚ほどで説明してくれ。それ  
よりも今の話に突っ込まなくていいのか？他に方法があったのに手  
を切られたんだぞ？

「別にいいわよ、なんか面白いし！傷もふさがってるしね」

手を見れば確かにふさがっている。何が起こった？あれは間違いな  
く血だと思っただが……。まさか新手の作品！？

「ふざけたこと言っていないで早くしなさいー！！」

何様だお前は。

「どっしますか？」

この期におよんでどうするもないだろうが。やってやるよ、どうせ

何も起きやしないんだからな。お前らの化けの皮がはがれるだけだ。

「まだ疑ってんの？小さい奴ね」

うるさい。俺のほうが身長は高い。

「誰が身長の話をしたのよ！器のことを言ってるのよ！」

冗談に本気で突っ込まないで欲しいものだ。そのたびに手に持っている剣がゆれて危ないっいたらありやしない。

俺は彼女から避難するように部屋の中心に向かうことにする。先ほどの机だ。

もっともこの場合、避難になってるかはさだかではないけどな。

ふと教師と視線が合う。なんでニヤニヤしてるんだよ……。その顔を避けた先にあっただのは不機嫌そうな顔。  
両極端だなおい。普通にしてってくれると助かるんだがな。

「血液は嫌なようですから、唾液あたりにしておきましょうか」

そうしてくれ。

「では、この綿棒に唾液をつけてください」

おとなしく言われたとおりにする。なんか病院で検査を受けてるみたいだよ。普通の病院には剣を持ったやつはいないだろうが。

「それでは選定を行います」

好きにしてくれ。教師が魔方陣らしきものに綿棒を近づけるのを見

ながら思っている、今日の夕食のメニューという、なんとも関係のないものだったのは、すごく寂しいな。

## 序章 6話

（序章）

### 6話

いつまでやるんだろうな？今の俺の気持ちを端的に言うならそれだ。目の前には難しい顔をしている教師に、少し視線をはずせば苛立ちが見え隠れする顔。

別に俺はまったく悪くないと思うのだが、どうやら彼女はそう思っていないようだ。

「ちょっと、あんた何やってのよ！！」

何やってるって言われてもな、こっちは指示どつりにやってるんだ。文句があるなら教師に言ってくれ。

「こんなはずはないのですが……」

もともと、自分の予想外の結果に半ば呆然としながらも作業を繰り返す教師に何を言っても無駄な気がするけどな。

結局、お前らの化けの皮がはがれて終わりってことだ。

「私は嘘は言っていません……」

と言われても、この状況じゃしょうがないでしょうに。そんな泣き

そんな顔しないでくれます？俺が悪者みたいに見えるから。んじゃ、俺は帰らせてもらいます。

「どこ行くのよ？」

踵を返した俺を引きとめたのはやはり彼女。近づいてくるのはいいが本当にその剣をどこかにやっつけてくれ。

「あんた、まさか帰るつもり？」

「当たり前だろう？早く帰って他の学校への編入を考えなきゃいけないんでな」

まさか入学の翌日にそんなことを考えなければいけなくなるとは夢にも思わなかったよ。

「今の状況を全部否定するつもり？」

否定も何もないだろう？俺には何も起こらなかった、それが全部嘘であることの証明には十分のはずだ。

それ以上に何か証拠が欲しいなら探偵でも呼んでくれ。こっから先は俺の管轄外だ。

「なら私のはなんなのよ？」

知るか。それからもう一度言うが剣を振り回すな。

「どうしてあんたは人の言うことを信じないわけ！？私がこいつらの仲間なわけじゃない！ー！」

実に真剣な瞳、といたいところだが、あいにく俺はそんな茶番に



騙される気は毛頭ない。それも演技の一環だろうしな。  
まったくよくやるよ。

「100歩ゆずってこの事態が真実だとしても、俺には何の力もないんだ。だったらここに俺が留まる理由は何もない。お前が真実だと言い張るなら好きにしたらいい。それに俺を巻き込むな」

面倒事は大嫌いだ。冗談じゃない。俺の言葉に何を感じたのかは知らないがつつむく彼女。少し言い過ぎた気もするが、これだけ言っとけば大丈夫だろう。

「だったら……」

俯いたまま言葉を発する。だったらなんだ？

「私も帰るわ」

は？何を言っただこいつは。

「だから私も帰るって言っただよ！！文句あんの！？」

別に文句はないが、好きにしるともいったし。だけどさっきまであんなに楽しそうだったじゃないか？

「うるさいわね。私は人に疑われるのが大嫌いなもの！」

怒気を前面に押し出しているが、その中に不安や悲しみみたいなものがみえるのはなぜだろう。

「疑われるくらいならこんなところにいる必要なんてないの。わか

「つた!？」

思わず頷きそうになるな、すんごい筋の通っていない理屈のくせに迫力がものすごい。大抵の人はこれでびびるぞ。

しかし本当に変わったやつだ。今日はじめて会ったやつ意見なんてそこまで重要なものだろうか？

俺だったら答えは否、聞き入れることすらしないだろう。ここに歩いてきているのが最大の譲歩だからな。

「まあいいさ、ならとつと帰ろうぜ」

「わかつてるわよ」

部屋から出ようと扉に向かう、はずだったのだが……

「何で？」

これは何の冗談だ？確かに俺達は後ろの扉から入ってきたはずだ。それなのに、

「どうして扉がないのよ!？」

そう、振り返ったその先に扉はなかった。あるのは白い壁、この部屋を囲うそれとまったく同一のもの。

どういふことだ、扉を破壊した？

いや違う。内外どちらから壊したとしても絶対に痕跡が残るはずだ。仮に残さない方法があったとして、それに俺達が気づかないはずがない。

だつたら扉に壁紙でも貼つたか？

それなら出来ないこともないだろうが、遠目からならまだしも近くに寄ればあつという間にばれてしまうのがオチだ。

こんなことはありえない。何をどう考えても不可能だ。

「何これ……、意味わかんない……」

軽くふらついているようだ。さっきまでの気丈な態度はすっかりなくなっている。その顔は青ざめてさえいる。

彼女は間違いない。これをしたのは彼女ではない。だとすれば、

「……………」

考えるまでもない。消去法で答えは簡単にでる。なにしやがったこのクソ教師。

「まだ話は終わっていません。勝手に帰られては困ります」

その顔に、わずかにだが微笑みが浮かんでいたのを俺は一生忘れることはないだろう。

## 序章 7話

### 序章

〈7話〉

頭がついてこない。現状を理解することを脳がかたくなに拒んでいるからだ。

「まだ帰すわけにはいかないんですよ」

目の前で教師が不適に微笑む。あの表情はやばい、俺の中の危険アラートがむちゃくちゃに鳴り響いて警報を発し続けている。

「さあ、こつちへ」

行くはずないだろうが。

心の中でそう叫んでみるが、いかんせん逃げ道がない。依然として入ってきた扉は忽然と姿を消したままだ。

この状況からしてあの教師が何かをしたのは明らか。だが、何をどうやって消したのかはさっぱりわからない。

どんな仮説を立てても物理的にどれも無理。唯一可能性があるならば、それはこの問題のもととの原因。

それがもし存在するというのはなら、何かしらの方法で扉を消すことくらい出来るだろう。だがそれを認めるわけにはいかない。

「どうなってんのよ……」

この場にいるもう一人の人物は俺の影で拳動不振でおびえている。さつき自分の手から剣を作り出したときは楽しそうだったくせに。つて、いかんいかん。これじゃあ、俺までこの不思議現象を魔術だと信じているみたいじゃないか。

「心配しなくても大丈夫ですよ。ただもう少し違う方法で選定をするだけですから」

「そんな戯言を信じるんでも？」

「信じる信じないの問題ではありません。それはあなたが一番わかっているでしょう？」

胸糞悪いやつだ。逃げ道を完全に消してから追い詰める。どんだけサディストなんだよ。

「ここにいる以上、あなたは魔術師の能力があることは間違いないのです。ですからそれを確認しなければならぬのです」

だから知るか。能力がないからさつき何も起こらなかつたんだろうが。

「先ほどの選定は簡易的なものです。それゆえに反応が起きなかつたでしょう。何事にも例外はつきものですから」

もっともなことを言ってる様に見えて無理やりな理屈。しかしこの教師の言葉には力がある。思わず納得してしまいそうになる力が。

「……………」

だからといって簡単に納得してやるつもりは毛頭ない。こいつの言っていることは明らかにおかしいのだから。

確かに気になることはある。何もないとところから、突如として剣が現れてみたり、何の前触れもなくいきなり出入り口が消えたり。

现阶段の俺の知識で説明できないことだらけが現実に目の前で起こっていることは否定できない。

しかしだ、それゆえにその事実をはいそうですか、と飲み込むわけにはいかないのだ。

「何度も言いますが危害を与える気はありません。ご心配なさらずに」

あんと同じ空間いるだけで大いに心配だよ。

後ろで彼女をかばいながら教師とは出来るだけ距離をとる。考えるべきはどうやってこの状況を打破するか。

魔術というものを俺が信じない以上、必ず出口は存在する。今はうまく隠蔽しているだけだ。だとするならそれを探し出すことが今の最優先課題。

だが、おそらく目の前のクソヤロウはそれを妨害してくるに決まっている。どんな手でくるのかは知らないが、こっちにとっていい手段ではあるまい。

そう考えるなら、

「おい、動けるか」

「え……………」

さつきから俺の影でぶつぶつと独り言をつぶやいている彼女に話しかける。何をするにしてもひとりでは無理だ。

「お前の協力が必要だ。もう一度聞く、動けるか？」

返答しないで状況が一気に変わる。もし拒否されれば絶望的だ。

「どうにかできるの？」

「確証はない。でも、やらないよりかはましだろう？」

「そうね、そうよね」

「その様子なら大丈夫だな」

「もちろんよ！！今までは少し動揺してただけなんだから！！さ、早く打開策があるなら言いなさい」

態度の転換が早い奴である。今はそのほうがありがたいけどな。ちなみにこのやりとりはお互い小声で行われている。大声で話して自分達の手の内を相手にみせるほど焦ってはいない。

もっとも当の本人、つまり教師は、俺達が何かを話しているにも関わらず何も言わずにただ立っているだけだ。

つまりそれはこの部屋からはそう簡単に出れないことを意味する。

本当に嫌な奴だよ……。

「いいか、よく聞けよ」

作戦の成功率は不明。状況を飲み込めない以上、推測なんて立てられるわけがない。それでも何もしないよりかはましだからな。

先手必勝だ！！

## 序章 8話

### 序章

〈8話〉

「理解したか？」

「誰に向かって言ってるのよ、当然でしょう!!」

まったく、頼もしいかぎりだよ。

さっきまで目の前の状況に混乱し、取り乱していた奴と同一人物とはとても思えないほどの回復振りだ。

その目から力強さがありありと見て取れる。頼もしいんだかなんかな。

「お話し合いは終わりましたか？」

ちよつと俺達の会話が途切れたところでそんなことを言ってくれやがる敵A。表現がおかしいって？

気にするな、俺から見たらあいつはすでに敵以外の何者でもないかな。

「それで一体どうするつもりですか？」

そんなものに答えてやる気などさらさらない。彼女にアイコンタクトを飛ばすと俺は右へ、そして彼女は左へと展開。



状況は2対1、ならばこれを利用しない手はない。左右からの同時攻撃により相手に隙を作り、そこに追い討ちをかける。シンプルすぎる作戦ではあるが、こういうときには複雑すぎるものよりもかえって単純なほうが成功しやすいものだ。

教師との距離が縮まる。

おそらくではあるが、教師の方は彼女の攻撃の防御を優先するだろう。なにせ手には剣をもってるんだからな。

素手の俺を防御するよりもそっちを防御する可能性のほうが高いに決まっている。だからそこをつく。

「はあっ！！」

彼女の剣が一閃。教師の体に振り下ろされる。もちろん刃は返してある。人殺しなんてごめんだからな。

峰打ちでボディなら、そう簡単に死ぬことはないだろう。

事前の打ち合わせ通りに攻撃は行われた。少なくとも、この攻撃でわずかでもダメージは確実に入ると計算していたのだが、

「いい連携ですね」

彼女が攻撃した先には何もなかった。

「呼吸もばっちり合っていましたし、攻撃速度も申し分ありませんでした」

肩にかかる髪を払いのけながら艶やかに微笑む。その体にダメージの様子はまるでない。

「何だよ……」

「何かおっしゃいましたか？」

「何であんたがそんなところにいるのよ!!」

その言葉にさらに笑みを深くする教師。絶対サディストだよな。

さて、冗談を言ってる場合じゃない。この状況はもはや理解の範疇を完璧に逸脱している。さっきまでの事態には、まだ無理やりながらも理屈はつけられた。

だが、今回はどうだ？

なぜあいつは、立っていた場所から一瞬で5メートルも移動できた？

俺の目がいかれてなければ、教師は俺達の攻撃の直前まで同じ場所に立っていたはずだ。

それが今や俺達の後方5メートル地点にいる。

ありえない。

「あんた何したのよ!!」

「これが魔術の一端というわけです。これで信じる気になりましたか？」

「なるわけないでしょ!!」

「では、あなたのその手にあるものはどう説明するのですか？」

「それは……」

「信じたい気持ちを隠す必要はありません。魔術は実在するのですから」

まったく口車のうまいやつである。政治家にでもなればいいのに。

でなければ弁護士だな。もっともこんな奴に弁護なんて死んでもしてもらいたくはないが。

「あなたには資質があります。その剣の発現が何よりの証拠。私の見る限り、あなたの潜在能力はかなり高いものだと思いますよ」

教師はさらに揺さぶりをかける。彼女の表情をうかがってみるが、その顔からはもはや迷いしか感じとれない。

どうする？

こうなってしまうては、もはや彼女は足手まといにしかならない。俺の見立てでは十中八九彼女は教師側の人間ではない。

もし、これで敵だとしたらたいした役者だ。

それにも関わらず、彼女の手にはまぎれもなく剣が握られている。あれに関してはいくらでも説明がつくが、今の彼女の状態では冷静な思考は無理だろう。

やむを得ないか……

「あなたが剣を振るう必要はありません。彼の選定が済むまでここで見ていてください」

「……………」

教師の言葉にゆっくりと構えていた剣をおろす彼女。一体、今頭の中で何を考えているんだろうな？

軽いパニック状態になってるんじゃないのか？

「さあ、これでゆっくり選定ができますね」

憎たらしい顔だ。

「あなたもおとなしく選定を受けてください」  
胸糞悪い。

「こちらへ来てください」

もう声も聞きたくない。

「おい、最終警告だ。俺をこの部屋から出せ」  
「ですから選定が済み次第すぐに出れますよ」  
「今すぐに出す気はないんだな？」  
「さっきから何度も言ってますが、選定が……」  
「わかった。もういいからしゃべるな」

やってられん。もう我慢の限界だ。

「なら死ねよ」

俺の理性が飛んだ。

## 序章 9話

（序章）

### 9話

感覚を研ぎ澄ます。全ての神経を目の前の相手に向ける。

#### 跳躍

教師との距離はおおよそ5メートル。コンタクトまでは一瞬。普通の人間ならこの距離の攻撃の避けることは出来ても、一瞬で数メートルの距離をとるのは不可能。

たかだが5メートルの距離が何十メートルにも感じる。ほんの一瞬のはずなのに。

その一瞬のうちに懐から取り出すはナイフ。先ほど彼女が剣を発現させたときにも出していたものだ。

教師との距離はもうほとんどないといってもいい。それでもまだ相手は動く気配をみせない。

それほど自分の動きに自信があるのか、または今度は避けずに真っ向から受け止めるのかは知らないが、注目すべき部分は一点だけ。

『足の動き』

移動するにしても、攻撃を受けるにしても、必ず重心の移動をする必要が出てくる。ゆえにそこに注目する。そうすれば相手がこれからどういう動きをするのかが先読みができる。

ナイフの狙う先は上半身の中心。狙う的が大きいほど当たる確率は増す。

切っ先が風を切り衣服に触れるの刹那、教師がついに動いた。いや、正確には消えたといったほうがいいだろう。

さっきはまだしも、今の攻撃は自分のすべての神経を集中させていたのだ。動きはとらえられずとも、その兆候くらいは読み取れるはずだ。

にもかかわらずナイフの刃先を空を切り、勢いを殺しきれなかった体が前に流れる。

致命的な隙。

次にくるであろう教師の攻撃に耐えるべく、防御の姿勢に入るがおそらく間に合わないだろう。

これほどの動きをするものが今の隙を見逃すはずがない。

しかし、予想に反して何の衝撃もなかった。それどころか、体勢を立て直してもまだ何の攻撃もこないのだ。

「……………どういっつもりだ」

今の局面、俺は確実に殺すつもりでいった。だが、目の前の相手はまた数メートルの距離をとるだけで何もしてはこない。

教師は相変わらずの笑みを浮かべている。その表情からは余裕以外のものが感じられない。

「何度も言いますが、私はあなたの適正をはかりたいだけです。あなたをどうこうするつもりはありませんよ?」

確かに、教師には敵意は感じられない。だからと言って信用しろというのは話が別だ。

「俺はこの部屋から出たいんだ。それ以外は断固断る」

「そうは言っても、あなたはここから出られません。それにもうわかったでしょう、あなたは私に触れることはできない」

「……ッ」

「もう一度いいいます。選定を受けてください。危害を加えるつもりはありません」

静かに諭すような声。これでは俺が反抗的な子供のようではないか。そうなれば教師はさしずめ母親か?

笑わせるな。

だまされるな。

この世に魔術なんてものはない。あいつの言ってることに惑わされるな。

「どうあっても信じられませんか?」

「当たり前だ。魔術なんてものを普通の人間が信じられると思うか？」

「普通の人間ならそうでしょう。ですが、あなたには魔術の才能があるのです。ならばそれを信じる事ができる」

「だが、さっきは何も起きなかったらどう？」

「ですから、さらに詳しい選定を行うと行っているのです。いい加減理解してください」

できるか、この大馬鹿野郎。

会話の間も思考は脱出だけを考える。教師に対する攻撃はおそらく無駄だろう。どういう原理であれ、あのスピードをとらえることは不可能だ。

それに今の目的は教師を倒すことではないのだ。ならばやることはひとつ。

チャンスは一度

ポケットの裏にそれがあることを確認する。たしかな重み…、あとはタイミングのみ。

「私としてもこれ以上は時間をとられたくありません。これ以上抵抗するというのなら実力行使もやむをえません」

時間はない。狙いを外すな。



「死んでもごめんだね」

「仕方ありませんね。では……」

言葉を最後まで言わせるな。ここで仕掛ける。

今まで武器にしていたナイフを投擲する。避けるその機を見逃すな。投げたその瞬間に背後の壁、さっきまで出口があった場所に走る。出口は見えない。だが少なくともさっきまではそこにあったのだ。ならば壁の向こうには出口がある。

ないなら作ればいい。

ポケットから取り出すは手榴弾。小型だが、それなりの威力はある。壁を破壊するくらいはなんてことはない。

行け！！

手榴弾が壁にあたる。次の瞬間、部屋中に衝撃が走った。

## 序章 10話

〔序章〕

10話

部屋の中を爆風とともに巻き上がった砂ぼこりが覆い尽くす。壁にぶつけられた手榴弾はその威力をいかなく発揮し、その壁を破壊していた。

「なんだと…!？」

俺はその爆風の合間にその壊れた壁から脱出するつもりでいたのだ。道がないなら作ればいい。

タイミングも完璧だったため教師からの妨害も入らなかった。そのはずだった。

「繰り返しますが、この部屋からは出られません」

すでに何度目かもわからない言葉。ほんの少し前までは、どうにかなると思っていた。だが、この状況にさすがの俺も諦めという言葉が脳裏をよぎり始める。

「何をしゃがった……」

あきらかにおかしい状況。確かに破壊した壁。破片は散らばりばかりと大きな穴があいている。

だが、その向こう側がおかしいのだ。俺がこの部屋にきたときにとおってきたのは大理石を一部の隙間もなく敷き詰めた綺麗な廊下。しかし今、眼前に広がっているのは暗闇。というか黒。それ以外の認識をすることができない。

この状況を見るのがあと少し遅れていたら、俺は今頃この暗闇の中に飛び込んでいたことだろう。

「そうですね、魔術を信じてもらうためにも少し説明しましょうか」

そこで一度言葉を切る。俺はその姿を視界の正面にいれ、無駄だとわかりつつも打開策を考える。

「一口に魔術といっても様々な効果があります。すぐに連想されるような炎や氷などの自然現象を巻き起こす魔術。傷ついた者を治癒する魔術。自身や相手を変化させたり。その他にも多種多様、千差万別な魔術があります」

「魔術師により使用できる魔術の特性は異なります」

なるほど。1万歩ほど譲って魔術を信じたとして。だとしたらこの教師の能力はなんだ？先ほどの高速の移動からして、肉体を強化する魔術？だけどそれじゃあ、この部屋から出られないことに説明がつかない。

「私の魔術特性は時空間の操作。ここまで言えばあなたならわかるんじゃないですか？」

「わかるかよ！」

そんな短絡的な説明で何を理解しろって言うんだ、この野郎！！

「簡単なことです。高速の移動は時空を歪めることにより素早く移動したように見えただけです。現在、この部屋から出られないのは部屋と外の時空座標をずらしただけです」

意味がわからん。時空の座標をずらすという概念がそもそも理解できない。

「この部屋をもとあった場所から移動させたと考えてください。周りに暗闇しかなくそれ以外に何も無い世界の中心に移動させたと。少し理論は違ってますが、理解するには十分でしょう」

これで十分だと感じたのか、教師はそれ以上この状況に対する説明をしようとはしない。確かに、それが真実なのだとしたら、さつきまでの不可解な出来事にすべて説明がつく。

一瞬で数メートル移動したことも、出口が消えていることも、壁の外が暗闇であることも。

しかし、だからと言ってはいそうですかとは言えない。何より俺の自尊心のようなものがそれを認めることを断固拒否している。

「もういいでしょう？諦めてください」

ここまでなのか？

いくら認めなくてもこの状況が好転するわけでもない。正直なところ、これを打開する手だてはもうない。

時空を操るなんて、そんな魔術の中でもチートのような能力を使われているのだとしたらなおさらだ。

認めないけど……。

ナイフを構えなおす。無理だとはわかかっていても素直に従う気は毛頭ない。

「まだ抵抗しますか。いいでしょう、ならそろそろ力づくでやらせてもらいます」

覚悟を決める。

足に力を入れ、切り込もうとしたその瞬間だった。

「何をやっているのですか!?!」

凜とした声が、部屋の中いっぱいに響き渡った。

## 序章 11話

〔序章〕

### 11話

「何をしているのですか!!」

部屋の中に鳴り響く声。その声は凜として鋭く、臨戦態勢だった俺が一瞬でその声の主を探してしまうほど綺麗に俺の耳に入ってきた。

「どうしてあなたはこうも無茶苦茶なことを……。まして生徒と」  
部屋の惨状を見てから教師に視線をとばし、珍入者は大きなため息を漏らす。赤みがかった縦ロールの髪を指でいじりながらジト目でもう一度部屋を見回す。

「はぁ……」

そしてまた溜息。なんだかひどく気の毒に思えてならない人だ。

「少しばかりこの子が抵抗するものですから仕方がなかったんですよ校長」

「だからと言って実力行使などもってのほかです!!」

まさに一喝。校長と呼ばれたその人は教師の言葉を一刀のもとに切

り捨てた。

校長……、縦ロールのせいか、どこか西洋を思わせる物腰。黒を基調とした、まるでローブのような衣服。しかしその一番の特徴はいえはその顔。

いったいいくつだよ……。

校長というからにはそれなりの年だとは思っただが、その容姿からはどんなに多く見積もっても20代前半のイメージにしかない。すばらしき童顔。

「もういいです。ここから先は私が引き受けますのであなたは部屋の片づけでもしていらっしゃい」

「校長がそうおっしゃるなら」

なんだかしらないが勝手に話が進んでいる気がするのだが。どうやら俺の選定とやらを校長が引き受けたというだけで、状況はまるで変わっていない。

「二人とも付いてきなさい。続きは私の部屋ですることにします」

二人という単語で思い出したのだが、そういえばこの部屋にはもう一人いたのだ。部屋を見渡してみると、隅のほうで半ば放心状態でそいつは立っていた。

「そちらの子は大丈夫じゃなさそうですね」

校長は静かに彼女に歩み寄ると何かを耳元でささやく。すると今ま

で力のなかった眼に生気が戻ってきたようだ。

「あ、あれ？私何で？あれ？」

「さ、私についてきなさい」

なんだか知らないが彼女は持ち直したらしい。しかもどういっわけかしきりに頭をひねりながらも大人しく校長についていく始末。

洗脳でもしたんじゃないだろうな？

というかその方が理屈として非常にすつきり通るのだが。ともあれ俺までもが黙ってついていく理由はない。現状は、さっきまでなっかた出口が現れた上に最大の敵であった教師はすでにこちらに注意は向けていない。

ここから脱出するには絶好のチャンスというわけだ。

出口に向かって歩く。

何にせよ、この部屋から出なければどうしようもない。とりあえず大人しくついていくふりをして部屋から出たところで逃げればいい。そう考えた俺の判断は決して間違っていないかったはずだ。というかそれ以外に選択肢はなかった。

とすれば、さらなるこの不思議状況は俺が目目の前の協調なる人物を見くびっていたという明確な証拠。

「さ、お二人ともそこにお座りなさい」

部屋を出たその先に待っていたのは老化ではなかった。そこにあつ



たのは最高級ホテルの水々ルーム顔負けの豪華な部屋。  
なんというかどこか城の中を思わせる調度品の数々。磨き上げられ  
た床には自分の姿が反射して映るほどだ。

「先ほどはすみませんでしたね。神崎先生はとても優秀なのですが、  
いかんせん融通がきかないというかなんというか……」

どうやら先ほどの教師は神崎というらしい。正直どうでもいいこと  
だが、さっきのすぐ後だ。その名前はどうやっても忘れられなさそ  
うではある。

「ちょっと！いったいこの状況はどうなってるのよ！！」

さっきまで蚊帳の外だったくせに急に勢いを取り戻し始めたらしい。  
いまだに剣を手に握り締めたままなのは突っ込むべきなのだろうか。

「落ち着きなさい。ちゃんと説明しますからまずはそこにお座りな  
さい」

彼女はさらにまくしたてるかと思ったが、何を思ったのか大人しく  
部屋の中央に据え付けられた応接用らしいソファに腰を下ろす。

「あなたもお座りなさい」

「俺が従うとでも？」

「拒否する理由はないと思いますよ？」

理由なんざいくらかでもあるが、なぜだろう？そのどこか優しげな声  
に言葉をつづけられなかった。どうにもその口調には絶対性という

か、そう言った何かを感じる。

「俺は立ったままでもいい。説明があるならとつとつとええ。俺は早く帰りたいんだ」

「あなたがそれでいいのなら強制はしません。では、」

校長は彼女の向い側の席に座る。俺はソファの後ろにもたれ話を聞くことにする。後ろを取られないようにするためにせめてもの防御もつとも、さっきの神崎とかいう教師のようなことをやられたら何の意味もないのだが、それでもやらないよりかはましだ。もちろんナイフは出したままにしておく。いまだに先が見えない状況で、武器をしまう理由はどこにもない。

「この学校は…」

校長の説明ははじまった。

## 序章 12話

〔序章〕

### 12話

今から100年前のこと、当時魔術は才能であり、その力をもつものは優れていると考えられていた。その考え方のせい、魔術を学ぶということを考えるものはおらず、おのおの好きなようにその力を使っていたのが現実だった。

そのため、正しく力を使えないもの、つまりその力をもつて悪事を働いたり、力に吞まれ暴走してしまうものが多数いたのも事実。

「そんな状況を改善させるために作られたのがこの学校です」

私立月影学園。

表向きは一般の高校であるが、その実は魔術師の魔術師による学校力の制御を目的とし、その力を正しく使えるよう導くために作られた学園。

「当時はあまりその考えが理解されずに大変だったそうですね」

最初のころは入学希望者もろくにおらず、むしろ学校そのものをつぶそうとするものが多かった。しかし、数少ない生徒の中からその力を正しく制御し、その結果、類まれなる魔術師が世に排出され始めるころには、だんだんと学校は世に受け入れられ始めた。

「それを実現させたのが私の祖父、夕凧閃です」

閃はもともと圧倒的な魔力の持ち主だったが、当時から人とは違った考えを持ち、変人とまで呼ばれていた。

それでもこの世を去るころには、その実績から正規の大魔術師と呼ばれるようになっていた。

「その後、月影学園は祖父の遺志を受け継ぎ今日にいたるのです。そして現在の校長は私、夕凧命となっておりますわ」

そこで校長は一度話を切り、いつの間に用意したのやら手元にあった紅茶を口に流し込み喉を潤している。

ここまででわかったことと言えば、この学校の歴史のみ。それも魔術なんてものがあるという前提での話だ。

そんな物の存在を信じていない俺にしてみれば、今聞いた説明は何の意味もなしてはいない。

「それで！？早く続きを聞かせなさいよ！！」

なぜそこでおまえは目を輝かせている。

校長にあてがわれたソファに座っている彼女は、どういつつもりか続きが気になって仕方がないらしい。

信じてるんだか、信じてないんだかどっちなんだろうな。

「そもそも魔術というものは非常に危険なものです」

この世の中はあらゆる物理法則から成り立っている。今、ここで座ったり立ったりすることひとつをとっても重力や空気抵抗、さまざま

主要因が関与している。そもそもこの宇宙の誕生ですら、現在の科学では物理的に証明ができるほどだ。

だがしかし、魔術というものはそれを根底から覆す。例えば、魔力によって空間をゆがめるなど、あらゆる物理法則を真っ向からたたき壊すといってもいい。

「現代社会において魔術なんていうものは無用の長物といっても過言ではないでしょう」

だからこそ間違った使い方をしてはならない。正しく使えなくとも、せめてその使用用途を悪となる方向で使わないようにしなければならぬ。

「ゆえに魔力をもつものは、必ず魔術に関する教育を一定期間受けなければならぬことになっているのです」

「その教育機関がここってことなの？」

「ええ、あなた方が今ここにいるのもそのためです」

なるほど、さっきの教師よりかはましな説明になったと言ってもいい。しかし、これもまた魔術があるとしての話だ。結局は説明にはなっていない。

「100歩譲ってここが本当の魔術学校だとしてもだ、俺にはその力はないようだな。ここにいない必要はないんじゃないか？」

「いえ、あなたにはしっかりとその才があります」

「だが、さっきの選定とやらではなんの反応もなかったぞ？」

「一応私は校長ですから、その程度を見極めることはできます」

そりゃなんともありがたいことで。

紅茶をゆつくりとするその姿だけを見れば、さながら宮廷貴族のようにも見えるのだが、さっきからの発言からそれも全部台無しだ。見極めるといっても、そんなものは証拠にはなりはしない。それにあるというのなら、さっきの選定ひっかからなかったことに説明がつかない。

「あなたが先ほどの選定で何の効果も得られなかったのは、おそらくあなたの潜在魔力が極端に少ないからでしょう」

何事にも例外はあるものです、とほほ笑む校長の顔は真顔で、冗談を言っているような顔にはみえない。

「どつちにしろ俺がここにいる理由はない。俺が送りたいのは普通の生活だからな」

「それは今までがそうではなかったからですか？」

何気ないその言葉に俺は戦慄した。校長の表情はほほ笑みから一部も変わってはいない。それゆえにその感情を読み取ることができない。

どこまで何を知っている。

部屋の中の緊張感は一気に高まった。

## 序章 13話（前書き）

今回の話では、急に聞きなれない名前が出てきます。理由としては、序盤のお話を書き換えて修正したのでそういったことが発生してしまいました。いまのところ1話と2話の修正となっておりませんが、今後もそういったことがあると思います。もし読んで不自然さを感じましたら、修正部分を見ていただけると幸いです。読者の皆様に余計な御手間をかけさせることになりましたが、なにとぞご容赦ください。ストーリーの大筋には変更はございません。

敬具

## 序章 13話

〔序章〕

### 13話

それはたった一言だった。しかし、その一言はこの部屋全体を先の神崎教諭との戦闘と同じほどの緊張感に戻すには十分だった。再び戦闘態勢に移行する。

「な、なによ、いきなりどうしたのよ!？」

言葉の真意をわからない三枝は、ただ空気が変わった状況に焦るばかり。張本人はと言えば、俺の放つ殺気を受けても以前余裕の表情をくずさない。

なんだってんだよ……

さっきの言葉だけではすべてを読み取ることは不可能だが、少なくとも何かを知っていることは確かだ。もちろん俺の返答に対して、そのまま返しただけと言われればそれまでだが、この校長が言葉に含ませたのは決してそれだけではないはずだ。

「何がいいたい……」

はっきりとした真意がわからない以上、会話を続けるほかない。



「あなたの思っている通りだと思えますよ？」

俺の思惑を無視してうまくかわしてくる。年の功というべきか、外見的にはそうはみえないが、その余裕を崩して本音を引き出すのは今の段階では不可能に近いだろう。

ただなんとなくだが、この校長がはったりをかましているようにはどうしても思えなかった。ただそこに座っているだけなのに、威圧されている。そんな感覚だ。

「私としてはあなたはわが校に入るべきだと思うのですが？」

「あんたの意見は重要じゃない」

俺の返答に、校長は少し肩をすぼめて見せると今度は三枝のほうへと会話の対象を変える。

「あなたはどうです？」

「私？」

「ええ。確かに説明不足なところはあると思いますが、これまでの話やあなたが経験したこと、それらを踏まえてうえでわが校にこのままとどまることを希望しますか？」

相も変わらず柔らかな口調。三枝がここの学校で経験したことと言えば、それはそれは世間の一般からかけ離れたことだろう。初日から頭のねじがぶっ飛んだやつらの中に放り込まれ、どういう原理だかは知らないが、いきなり剣を手にし、さらには映画のような戦闘に巻き込まれる。はたから見れば楽しそうにうつるかもしれないが、

こんな経験からそこにとどまりたい奴はいないだろう。いたとすればよっぽどの馬鹿だ。そいつも頭のねじ吹っ飛んでいるのだろ。

「私はいいわよ」

見事にねじが吹っ飛んでいた。

「おい、お前今何て言った？」

「だからいって言ったのよ」

「正気か？さっきあんなことがあったっていうのにここに居続けるつてのか？」

「そりゃ少しは驚いたわよ。でもなんだかおもいろそうじゃないの  
！！！」

耳を疑った。つい1時間ほど前までは怒りに燃えていたその顔は、お気に入りの玩具を手に入れたかのような期待に満ちた顔に変わっている。

「魔術だかなんだか知らないけど、少なくともここにいれば毎日退屈にすごすことはなさそうだね。願ったりじゃない！！！」

お前の願いなんぞ知るか。

「高校に入れば少しは人生が楽しくなるんじゃないかって、そればかり考えてたのよ。中学なんて本当につまんなかったから。でもこれで確定ね！私の高校生活は最高に楽しいものになるわ！！！」

喜色満面とはまさにこのことを言うのだろう。なんとも晴れ渡った笑顔、ここはこう表現するのが一番適当であるように思える。しかしよくよく考えればすごいやつだ。こんな理不尽空間に放り込まれてそれを面白いと言えるやつが一体どのくらいいるだろうか？もつともこの学校にいるやつは全員が全員そう思うんだろうが、ねじの飛んでるやつらだから例外だろう。

「理解が早くてたすかりますわね」

どう考えても理解しているわけじゃないと言ってやりたい衝動にかられる。しかし結果的には三枝が自らここにとどまる意思を表明したことにはかわりない。この世は結果がすべてなのだ。だからと言って俺がそれに付き合う理由は何もない。

「悪いが好きにやっててくれ。これ以上は付き合いきれない」

「何よ、あんたもここにいればいいじゃないの」

「お前は魔術とやらが使えるんだろうが、俺は使えないからな。いる意味はない」

魔術なんてもん信じちゃいないがな。それでも三枝はなおも食いだがる。というかさらに支離滅裂なことまで言い出した。

「いいじゃない使えなくたって」

「は？」

「だから使えなくてもいいじゃないって言うてるのよ」

もはや意味がわからん。校長の言葉を借りるなら、ここは魔術師の育成の現場なのだ。こいつはそこに使えない俺をとどまらせようとしている。しかもそれを肯定して。

「使えなくなつて知ってるじゃない。知っているってことは使えるつてことと同義で考えてもいいと思うわよ?」

広辞苑には絶対同義の意味では書いていないだろう。

「深く考えなくなつていいじゃない!! だつてこんなにおもしろうそうなんだもの!!」

いつの間にその使用法を覚えたのか、さきほど出現させた剣を出したり消したりし始める。確かに楽しそうではあった。

「さあ、どうします?」

ベストタイミングのつもりのか、再び校長が問う。忌々しい奴だ。なんで俺がこんなに頭を悩ませねばならないのか。どれもこれも全部この校長のせいだ。夕凧だかなんだか知らんが……

「夕凧……?」

ふと頭に引つ掛かる単語。小さな引つ掛かりだつたそれは徐々に脳内に波紋を広げ、記憶の中から一枚のページを呼び起こす。

「あんた夕凧つていったよな?」

「ええ、私の性ですが」

「偽名じゃないな？」

「正真正銘私の本名です」

奇妙な偶然もあつたものだ。こんなところで探し物のてがかりをみつけれられるとは。いやはや、世の中わからにものである。

「わかった。俺もここにいることにする」

急に意見を転換した俺に、三枝は疑問を、校長は驚きを見せていたが構いはしない。探し物につながるてがかりかもしれないのだ、その真偽を確かめるまではここにいてやるぞ。

## 第1章 1話

〔第1章〕

1話

そこに俺は立っていた。立ち込める硝煙のにおい。崩れ落ちる建物。無残に転がるつい数分までは人であったもの。その中に俺は立っていた。燃え盛る炎の中で右手には一丁の銃、左手にはナイフを持って。目の前に現れるものすべてを壊す。ただひたすらに、意味もなく。

それが俺の選んだ生き方なのだから……

ガバツ

真っ先に目の前に飛び込んできたのは見慣れた俺の部屋。ワンルームのどこにでもある一人暮らしにもってこいの格安物件。少しだけ開いたカーテンの隙間から朝の光が差し込んでいる。時計に目をやればアラームをセットした時間よりも30分ほど早かった。

夢……か……

最近はめっきり見なくなっていた昔の夢。昔とはいえほんの数年前の出来事だが、それでもなぜか意識の上ではひどく昔のように感じられた。そんな夢を久しぶりに見た理由は明白である。昨日の神崎

とかいう女教諭との戦闘が原因だろう。

つくづく癪に障るやつだ……

今更寝なおす気にもなれず仕方なしにベッドから起きだした俺は、またあの学校に赴くために必要と思われる銃ン美を始めるのだった。

「あんた何考えてんのよ！！こんなぎりぎりの時間に来るなんて脳みそ溶けてるんじゃないの!？」

教室の扉を開け、一番最初のセリフがこれだった。顔の前でそんなに大声を出すな。唾が顔にかかるし、何より耳が痛い。

「あんたが遅いから私一人でいいさらし者じゃない！！少しは人に気を使うってことを覚えなさいよね!!」

何やら三枝が理不尽なことを言っているがもはや無視だ。そんなことを俺がいわゆる筋合いはどこにもない。もつとも、こいつが言いたいことがわからないでもない。まだ信じたわけじゃないが、ここは魔術学校であり、俺たちはそれを真つ向から否定した人間なのだ。その後にいるいるあつてここにいることを決めたわけだが他のやつらはそんなこと何も知らない。それゆえに俺たちに好奇の目が集まることは、もはや避けようのない事態である。俺がギリギリに来た理由の9割9分9厘はそれなのだが、どうやら三枝はそんなことは歯牙にもかずに早めに登校し、そのまま自爆したというわけだ。

「ほんとに朝から不愉快だわ！ちよつと2、3発殴らせなさいよ！」

本当に理不尽なやつだ。世界理不尽ランキングなんてものがあつたら、間違いないくトップ3に入るであろう理不尽さである。ネーミングセンスがないのは自分でもわっかってはいるが今は置いておこう。

「俺が殴られなきゃいけない理由がわからんし、そもそもその剣を出すな！」

いつの間に出したのやら、三枝の手には昨日の剣がまた握られている。これがこいつの魔術なのかなんのかはしらんが神様も余計な力を持たせたものだ。どうせ持たせるならもつと危なくないものにしてもらいたい。

「いいじゃない、減るもんじゃないし」

「そついう問題じゃないだろうが」

昨日も感じたが、どうやら三枝はその能力なのか手品だかは知らんが、それをいたく気に入っているらしい。そんなにきらきらした表情をするな。なんだか信じたくなくてきちまうだろう。

それは無性に腹が立つのでとりあえず三枝から視線を外してみると、教室にいたすべてのやつらの視線がこつちに向いていることに気づいた。まあ、あれだけ騒いでいればいやでも注目は集まるだろうさ。

やれやれ、ギリギリにきた意味がまったくありゃしない。もう一度視線を教室に飛ばしてみると、少し様子がおかしいことに気付いた。つきり俺たちを遠巻きにした冷ややかなものだと思っていた空気が、どこことなく浮ついた、それでいて好奇に満ちたものだったのだ。

そしてその注目を一手に集めているのは三枝がもつ剣。



何がそんなに珍しいんだ？

確かに三枝はいきなり魔術（もう否定するのがめんどくさいからそう呼ぶことにする）でその剣を出した。だが、こんなのこいつらからすれば別に珍しいことではないはずだ。摩銃という現象を知っているからこそ、昨日俺たちが反論を展開していた場でも誰も何も言わなかったはずなのだから。

そんな風に俺が頭を悩ませていると、教室前方の扉からあまりお目にかかりたくない顔が現れる。

「全員着席してください」

神崎（先生などとは死んでもつけたくはない）は昨日と同じように悠然と教卓にのぼり教室を見渡す。その途中で俺たち二人を見つけると

なぜか少し安堵したような表情を見せた。

「全員出席しているようですねによりです。その二人は早く着席してください、HRをはじめますから」

なんだか素直に従いたくはなかったが、無駄なことはしたくない。三枝もいつの間にか剣をしまい、自分の席に座る。

「それでは、HRをはじめます」

いよいよ本格的に魔術学校での生活がはじまった。

## 第1章 2話

〔第1章〕

### 2話

デジャビュ。それまでに一度も経験したことがないのに、かつて経験したことがるように感じる。広辞苑を引けばその言葉は、そんな意味で出てくる。だから今俺が感じているのはそれとは違うものなのだが、一番最初に浮かんできた単語はそれだった。まあ、日本語が本来の意味で使われていないことは日常茶飯事であり、そんなことを気にするのは馬鹿らしい。それよりも今の状況のほうが問題である。

「ほら、早く構えなさいよ!」

なぜお前はそんなに目をららんと輝かせている。

三枝は魔術で出した剣を振り回しながらにこにこ顔である。その後方、斜め45度くらいの位置に神崎教諭が立っている。そして俺は三枝とちょうど5メートル離れた位置に正対し、手には刃渡り20センチほどのナイフを逆手に構えている。普通の高校ではまずあり得ない光景。というか三枝に至っては銃刀法違反で逮捕ものである。

さて、どうしてこうなったものやら。

つい30分前の出来事が、なぜかひどく遠い昔のことのように感じられた。

HRの終わった後は、各々専攻の魔術クラスというものにわけられた。なんでも一般教養、主に数学や国語など、どこの高校でもやるようなものは今いるクラスで行うらしいが、魔術の教育はその例外となるらしい。誰もが同じ系統の魔術を操るわけではないので、それというシステムになっているというのは昨日説明したらしいが、あいにくと俺はそのとき神崎教諭との戦いの真っ最中。もちろんそんなことは知る由もなし。それは三枝にしてもおなじだった。

「八雲さんと三枝さんは私の受け持ちとなりますので」

そこに登場するのがまたも神崎。お前は俺たちのストーカーか何かなのか？

「詳しい事情は授業を行う場所で説明しますので、今は付いてきてください」

あまり気のりはしないが、この学校で過ごすとした以上、それに反発するわけにもいかないだろう。仕方がないのでついていくことにする。隣で三枝が思いつきりしかめっ面をしているが、おそらくこいつも神崎教諭にはあまりいい印象はないのだろう。

連れてこられたのはまたまた何も無い部屋。作り自体は昨日のものと変わらないが、今日のそれは本当に何も無い。もう部屋というより箱といったほうがいいのではないだろうか？

「それで、なんで私たちだけ別なのよ？」

最初に口を開いたのはやはりというか三枝だった。

「せっかく私がここにいるって言うてあげてるのに、まさか昨日のあれがあったからって変な扱いしてるんじゃないでしょうね!!」

その可能性は高い気がするが、なぜこいつはそんなに上から目線なのだろう?もつとも、それで話が進むんだったら別に問題はない。というかそれが俺に向けられていなければ尚問題ない。

「今から説明しますのでこちらへどうぞ」

神崎教諭は俺たちを部屋の中央にいざなう。そして空中に向かって少し手を挙げる。すると、手を触れたあたりの空間が歪み、そこからホワイトボードが現れる。

「それでは説明に移りますね」

ホワイトボードと一緒に現れたペンで何かを書き始める神崎教諭。そりゃ説明してくれといったのはこっちだ。だが、説明する事項を増やせとは言っていない。

「まず魔術系統についての説明ですが……」

「その前にいきなり出てきたホワイトボードの説明から頼む」

この状況にさほど同様なないのはなぜだろう?隣の三枝は目を見開いて固まっているというのに。

「ああこれですか。昨日もお話したはずですが、私の魔術特性は

時空の操作です。今、このホワイトボードを取り出したのもそれですね」

こともなげにそう言う神崎教諭。

「簡単に言えばワープみたいなものです。あなた方も漫画か何かでワープぐらいは知っているかと思いますが、あれの原理は自分がいる地点の座標と行きたいところの座標を結ぶことです。一枚の紙を想像してみてください。そしてその両端に黒い点を打ち、ちょうどその点が重なるように紙を折る。すると今まで遠いところにあったはずの点は見事に同一地点になるというわけです。私がやったのはその応用みたいな感じですね」

たった数行の説明で過去の科学者のすべてを打ち砕きやがったよこの野郎は。理屈はなんとなくだが理解した。だがそれを納得できるかは別問題。見てみるよ、三枝だってそんな説明じゃ……

「すごいじゃない！！魔術ってそんなこともできるのね！！」

いたく素直に納得してしまっているようだ。

「ますますおもしろくなってきたわね。さ、早く続けなさいよ！！」  
もつともこいつがここにいる理由が『おもしろそう』ということに尽きている以上、理屈は関係ないのかもしれない。ようはおもしろいかそうでないか、それが三枝のすべてなのだろう。

「では、続けます。何度も言いますが魔術の特性は人によってまったく異なります。もちろん似た特性をもつものはいませんが、完璧にすべてが一致することはありません。いうなれば人DNAみたいな

ものです」

「そうはいつでも、魔術を教えることできる教師の人材もそうは多くありません。ですから我が校では、特性の似た人たちを分けるという形をとっています。代表的なのはエレメンタルでしょうか？その名の通り、自然要素、想像しやすいところでいきますと『火炎放射』『竜巻』など、いわゆる漫画やアニメなんかで良く出てくるあれですね」

なんとなく昔見たアニメの断片が頭で再生される。あれが現実には？

「例をあげればきりがありませんので後はここで生活するうちに覚えてください。この高校だけでも多数の魔術特性をもつ人とたちがいますから、そのうち嫌でも覚えることになると思います」

なんだか非常に不吉なことを言われた気がする。嫌でもとかいう言い方はやめてほしいものだ。ただ、だんだんと魔術というものがわかってきた。もっとも未だに信じ切ってはいないので、それがあると仮定しての話だが。

「それで私の魔術特性ってなんなのよ！！もったいぶらずに早く教えなさい！！」

別にもったいぶってはいないだろう。ただ説明の順番があるだけだ。そう言ってやろうとも思ったが、今の三枝に何を言っても無駄だろう。その顔をみれば、三枝がどれだけ興奮状態にあるかは一目瞭然だ。

「ちやつちやと言いなさい！！もう早く魔術っていうのを使いたいだから！！」

そう早口にまくし立てる三枝。その様子をなぜだか微笑みながら見ている神崎教諭。なんだこの母と子みたいな構図は？

「三枝さんの特性はその剣を発現させているところです。魔術特性では召喚系にあたりますね」

召喚。よく聞く単語だが、俺の知ってる召喚は全部生物が絡んでい  
る。だが三枝のはあくまで向無機物。召喚というにはなんだか違和  
感があるような。

「確かに召喚と言われると想像するのは有機物体でしょう。ですが、  
どちらも原理は同じなんです。有機物体を召喚するというのは、そ  
の召喚対象が生息している別世界からそれを呼び出すというものな  
んです。無機物体にしてもそれは同じで、別空間にある武器庫のよ  
うなものからそれを発現するというものです」

なるほど、簡潔な説明だ。つまり三枝はその武器庫から武器を発現  
することが魔術特性であるということか。だが、ここまで聞いても  
わからないことがある。なぜ三枝はここにいるのか。召喚系の魔術  
特性は神崎教諭の口ぶりからしてそんなに珍しいものではないだろ  
う。ならどうして三枝はそっちにまざらないのか？

「その疑問は簡単です。まず第一に無機物召喚系が今年度の一年生  
には三枝さんしかいないということ。そしてもうひとつは無機物の  
召喚。つまり武器を発現させるということはその発現させたもので  
戦う必要があるということですよ」

こんな長つたらしい説明文とともに現在にいたるわけなのだが。ハイテンションな三枝に対して俺のテンションは真逆、超ローテンションだ。

「武器の扱いを学ぶには実践が一番です。八雲君はその相手には絶好なのであなた方二人のクラス編成というわけです」

三枝の後ろにいる神崎教諭のその言葉に対して俺は沈黙で返す。校長が知っているのだから、その部下が俺の過去について知らないわけはないが、それでも気分は悪い。

というより知っていてなぜ俺をここにおいておくのか。

普通ならありえないその考え。この学校に入ってから俺の頭痛の種は増えるばかりだ。あらたな頭痛の種に気分が最悪になりながら、俺は三枝に正対するのだった。



## 第1章 3話

（第1章）

3話

ギイン

金属と金属がぶつかり合う音が響く。横からの一閃をナイフの軸をずらすことで受け流す。次いで繰り出される縦切りはスウエーでかわす。苦し紛れとばかりに放たれた突きは無情に空を切る。狙ったその場所にはもう誰もいない。

「これで5回目か？お前が死んだ回数？」

三枝の首元にあてたナイフの腹の部分で、首を少し叩いてみる。もちろん刃の部分は触れていないので痛くはないだろうが、それがナイフといえど凶器であるがゆえか、三枝の体はわずかにこわばっていた。

「攻撃が単調すぎる。さつきも言ったが、お前の攻撃は数手順繰り返すすぐにパターン化してくる傾向がある。だから簡単に攻撃が読めるし、対処法も簡単に浮かぶ」

首元からナイフを離してやると、ようやく三枝は人心地ついたのか昨日見せたような高圧的な目でこちらをにらんでくる。その眼はさながら獲物を狙う狩人のようでもあった。やれやれ、なんで俺がそんな目で睨まれなきゃいけないんだろうな。

「そんなこと言ったって難しいのよ！！大体こんなもの使うのだったはじめてなんだからね！！」

「さつきは喜々としてそれを振ってたのは俺の気のせいかな？」

「気のせいよ！幻覚よ！幻聴よ！あんたの脳が勝手に捏造したのよ！！」

まったくもってひどい言われようである。というか幻聴の使い方が明らかに間違っているのと突っ込んでやりたいところだったが、ただでさえつりあがった目がさらにつりあがるのは明白なのでやめておくことにする。

神崎教諭の指示のもと始まった三枝の訓練が開始してから早30分。初めこそ意気込んでいた三枝だったが、次第に自分の思い道理にならないことが気に入らないのかあからさまに不機嫌になっている。ガキみたいな反応をするやつだよな、などと思っても見る。ついでに後ろにいる神崎教諭のほうにも視線を飛ばしてみるが、やはり顔に笑みを張りつかせたままこちらを見ているばかりだ。ええい、忌々しい笑みをしやる。

「大体なんであんたはそんな動きができるのよ！！どう考えてもおもかしいじゃない！！」

「言っただろ？お前の動きを読めば対して労力は必要ないんだって。現に俺はお前の攻撃をよけるのにありえないようなアクロバットな動きをした覚えはないぞ？」

さつきから俺が三枝の攻撃をかわすのにしている動きは、はっきり

言って必要最小限だ。すでに攻撃の軌道が見えてるのだからその軌道に体に乗せなければいい。そのための動きなんて足を一步、多くても2、3歩動かせば事足りる。

「だからそれがおかしいって言ってるのよ!! どう見たってあんたこういう状況に慣れてるじゃない!! 大体、普通の人間なら刃物を突きつけられたらたいていびびるわよ!!」

その刃物を初めて扱うと言いながら、昨日神崎教諭に思いつきり切りかかったのはどこのどいつだ。

「昨日のことはいいの!とにかく今の問題はあんたよ!! あんた一体何なのよ!？」

なんとなくだけどその言葉は俺の心に刺さった。俺自身、自分の考えに疑問など何も抱いていない。むしろ自分は普通だと思う。だけど目の前の三枝は俺のことをおかしいという。あきらかな矛盾。

「少なくとも私はさつきからあんたに攻撃するのに気を使ってるのよ?いくら刃を返してあるからって当たったら痛いんだし」

「一度もあててないやつが気にすることじゃないだろう?」

「揚げ足とるんじゃないの!」

一喝されてしまった。しかし俺には三枝の言うことがイマイチわからない。俺が普通じゃない。それがずっと引つ掛かっている。そんなに変なのか? そう思ったそのときだった。

脳に鮮明に映し出される光景。月光の差し込む廊下をただ歩く俺。

その姿は返り血で真っ赤に染まり、足元にはいくつもの死体。窓ガラスにうつる、無機質な自分。

止める

それ以上思い出さたくなくて思考を振り払う。あんなことを思い出す必要はない。あれは昔のことだ。すでに過去の話だ。あれ以来俺は普通に生きてきたはずだ。

否定する。脳裏に焼きついた光景を否定する。

「急に黙りこんでどうかしたの？」

三枝の声がかつきまでの怒鳴り声から、どこか疑問、いや、心配を含んだ声に変わる。さっきとのギャップのせいなのか、少しずつ落ち着いてきた。

「なんでもない、続きやるのか？」

「いやえ、今日はこのくらいにしておきましょう」

俺の言葉に返答をしたのは三枝ではなく神崎教諭だった。いつ間に近くに来ていたのか、は知らないが、俺を見るその目はどこか危険なものを見るようだった。

「最初にしては十分すぎる実践でした。あくまで今日は慣らしみたいなものですから、あまり飛ばしすぎるのもあれでしょう」

「それもそうね。私も少し疲れたし」

三枝と神崎教諭が何かを話している。だけど俺にはその会話は耳には入ってこない。自分の手の中のナイフを見つめる。握っている黒い柄。そこに掘られた単語。

『D e a t h』

筆記体で書かれたその単語を見る。死をつかさどるその1ワード。

普通じゃないか……

気にしないつもりだった。忘れたつもりだった。でもどうやらおれは無理のようだ。俺が生きる限りそれは無理のようだ。

「どうしたのよ？早く行くわよ！ぼくっとしてたら時間がもつたじゃないわ！！」

三枝はすでにさっきのことなど歯牙にもかけていないようで、神崎教諭から食堂の場所を聞いている。その顔はまたニコニコ顔に戻っていた。

今は何も考えるな。

自分にそう言いきかせる。とりあえず今の瞬間だけは、自分の過去について考えるのはやめた。それは割とあっさりと止めることができ、これもこの魔術学校とやらにいるおかげかな、なんて、そんなことを考えていた。

## 第1章 4話

〔第1章〕

### 4話

三枝との魔術訓練、もとい戦闘訓練が開始してから1週間がたった。もとは何も知らない素人だから仕方なくはあるのだが、三枝の成長はどうにもイマイチだった。右から来る攻撃には右に反応し、左からの攻撃には左に、上からは上に、下からは下に。ようは思考が単純すぎて攻撃にも防御にも虚実がない。フェイントにめっほう弱いというのは戦闘においてマイナスにしか働かない。まして、三枝の魔術はいわゆる召喚。それも召喚できるのは無機物で、今のところはあの西洋調の剣一本だけだ。それゆえに通常の戦闘方式を理解し、実行できなければ三枝は戦うことはできない。もっとも、この学校の目的が魔術の制御である以上、無理に戦う必要など何もないのだが、それは三枝の負けず嫌いな性格が許さないらしい。

さらに困ったことに、俺たち二人のこの学校内での環境もよくなかった。入学式翌日の俺たち二人の起こした騒動は、どういったわけかあつという間に学校全体に広がっていた。おかげでこの一週間は針のむしろのような状態を強いられることになり、まったくもって居心地が悪かったのだ。そう言った状況と三枝の性格が混ざり合い、魔術訓練と称された戦闘訓練は毎日行われていた。

しかし今日は少し状況が異なる。あくまで魔術訓練の目的は魔術の制御にあり、戦闘能力の向上ではない。ゆえに今日は神崎教諭による召喚魔術に対する講義が行われている。しかし俺は今その場にい

ない。なぜなら俺は魔術なんて使えないのだ。校長の話によれば俺にもわずかながら魔力があるらしいが、何かを行えるほどの力はない。だったらそんな講義など聴くだけ無駄ちうことになる。そういうわけで俺は三枝の冷たい視線を背に価値ある自由時間を手にしたのだった。

「その価値ある自由時間を私との話にあてていいのですか？」

「用事があるから来てるんだけど？」

「それは失礼しましたね、八雲さん」

夕風命。月影学園の校長であるこの年齢不詳の女性は、優雅としか言いようのない仕草で紅茶を飲む。まったくもって謎なのだが、どう見てもこの校長は10代にしか見えない。これも魔術の恩恵なんだろうか、と思っても仕方ないのではなからうか。もっとも、まだ俺は魔術を完全に信じてはいないのだが。

「それで、今日は一体どういった要件なのでしょう？」

「自分で言うのもなんだけど、今の俺は非常に危険だぞ」

「はあ、危険ですか？」

何もわかっていないようなそぶりを見せる校長。

「一度ちゃんと聞いておくが、俺のことについてどこまで知っている？」

それはこの校長にはじめてであったときから感じていた疑問。はじめて会ったときとは言え、それはまだ一週間ほど前のことだ。だがこれだけは聞いておかなければならない。

「あんと神崎が俺について知っているのはわかってる。だがそれがどこまでなのかがイマイチわからない。仮に本当に深くまで知っているなら、三枝とあんなことをさせとくわけもない。だからと言って何も知らないにしてもあの時、はじめてここであんと話した時の言葉が引つ掛かる」

ついでに神崎教諭の視線も気になるが、それはこの場では伏せておくことにする。

「もう一度聞くぞ？どこまで知っている？」

返答次第ではこれからの生活が大きく変わってくる。別に深くまで知っているからどうというわけではない。俺自身それで困るわけでもない。だけど、周りへの影響がおのずと変わってくるのだ。とはいえ、結局何かをするのは俺なのだから、俺が困るといふことなのかもしれないのだけれど。

「……………」

夕風校長は何も答えない。空になったティーカップに紅茶をもう一度注ぎ、砂糖を2本、3本と入れていく。ひどく甘そうだ。

「私は甘いものが大好きなんですよ」

そう言いながらさらに砂糖を入れる。最終的には5本のスティックの砂糖を入れていた。あれではあの量の紅茶に溶ける砂糖の限界量



を超えて、下のほうに溶け残りがあるのではないだろうか？

「結論からいえば、私はそこまで八雲さんのことについては知りません。過去にあったことを少しだけ聞いた程度です」

今までのゆるんだ表情はいきなりをひそめ、その顔に似つかわない真面目で、それでいて荘厳なものへと変わる。

「もうひとつ言うならば、八雲さんに魔力はまったくありません。

先日は微弱ながらあると言ったのは、単に三枝さんがいたからです」

淡々と語る校長。俺はそれを黙って聞いている。

「にもかかわらず八雲さんがこの学校にいるのは私がそう計らったからです。この事実是谁も知りません。私が独断で行ったものです」

俺にはその言葉の真意がわからない。校長によれば俺には魔力がなく、本来ここに理由は何もないが、それでもここにいるのは校長が勝手にそうしたからだという。なぜ？俺は校長どころか知り合いと呼べる人間は一人としていない。知っている人間はいたが、

『そいつらはすでにこの世には存在していない』

「わけあって理由を話すことはできません。ただ一つ言えることは、私は八雲さんの過去について、その上っ面だけは知っていて、そのうえでこの学校にいらっているということですよ」

校長は伝えることは伝えたと判断したのか、それ以上は何も言わない。その表情もいつの間にかいつものやんわりとしたもの戻っている。おそらくこれ以上何を聞いても、情報を得ることはできないだ

ろう。

「上っ面だけでも知ってるなら、三枝の訓練がどれだけ危険かわか  
ってるんじゃないのか？下手をすればあいつは死ぬぞ？」

それゆえに単刀直入に言う。今日もつとも伝えたかったことを。

「今はまだ大丈夫だけど、いつまでも続く保証はない」

それほど俺は危険なんだ。それは一週間前の三枝の言葉であらため  
て自覚したこと。だからそれを伝え、警告する。だが、校長はもう  
その表情を変えることはない。ただ諭すように、

「それは承知の上です。ですから神崎先生をあなた方の担当にして  
いるのですし、それに」

そこで校長は言葉を切る。

「それに、あなたが三枝さんのことをしっかり心配しているうちは  
問題ありません。むしろ私のほうが心配しすぎていたみたいです」

## 第1章 5話

〔第1章〕

### 5話

誰もいない廊下を一人歩く。いつもならば生徒たちが教室を移動したり、友達と話している姿が見受けられるが今は授業中であり、自分以外の生徒は誰も見受けられなかった。校長との話はあの後すぐに終わったが、それはとても自分にとって満足のいくものではなく、どちらかといえば消化不良で終わったといった感じだ。

すでに自由時間であった魔術訓練の時間は終わり、一般教養である授業が始まっているが、そこでおとなしく授業を受ける気にはなれなかった。

校長に伝えられた事実。それによれば自分にはまったく魔力というものがないらしい。にもかかわらず自分はここにいる。なんらかの理由があるらしいが、それは教えてはもらえなかった。

「意味のわからないことだらけだ……」

普通の高校生活を求めてここに入学したというのに、待っていたのは魔術というオカルトなもの。そこで生活を始めて1週間が過ぎ、それらしきものを見せられはしたが、未だ半信半疑な自分。さらにそこに突きつけられる新事実。もはや何がどういう向きで進んでいるのかさっぱりわからない。そんな思考にとらわれていたからか、普段なら絶対に気付かないはずのない前からの人の気配にまったく気がつかなかった。

相手も他に意識をとられていたのか、お互いに真正面からぶつかる。

「「うあつ!?!」」

二人の声が重なり、続けて片方が盛大にひっくり返る。俺の方はかろうじて踏みとどまれたので、倒れたのは相手の方だ。

「いたた……」

「大丈夫ですか？」

「ああ、そっちは大丈夫かい？」

とりあえず手を差し出し起きるのを手伝うことにする。俺の手を借り、立ち上がったのは若い男だった。真新しいスーツに身を包み、きつちりと櫛をあてられた髪。その姿から新任の教師だと推測する。

「悪いね。少し考え事をしていたから」

「いえ、こつちも同じですから気にしないでください」

「そうか、じゃあ、僕は急ぐから」

それだけ言うと男はあつという間に立ち去ってしまった。それにしても、いくらなんでも気を抜きすぎだ、考え事をしていたとはいえ、前からの接近に接触するまで気付かないなんて。こんなことは過去に一度もなかった。いや、もしあったとしたら今頃自分はここにはいないだろう。そういう環境だったのだから。

それだけ俺自身普通に近づいているってことなのか……

また新たな思考の海に潜りそうになったが、それは途中で中断された。

「あなた！一体ここで何をしているんですの!？」

？、振り返った先にいたのは女生徒だった。しかしその姿はどこかで見ることがあるような気がした。

「今は授業中のはずです！！あなたのクラスと名前を言いなさい！」

授業中と言いながら廊下の真ん中でどなり散らすお前はなんなのかと思う。赤みがかかった髪に、縦ロール。どこかで、しかもつい最近見た気がする。

「聞いているのですか!？」

そこでようやく思い当たる。自分は今さっきその人物と話をしたばかりではないか。

「校長……、のそっくりさん?」

そう、その姿は月影学園校長『夕風命』にそっくりだった。しかしあつちが20代前半のような（実年齢は不詳だが）様子に比べて、こちらはさらにそれよりも若く感じる。しかし何より違ったのはその目つきだ。校長の目つきは柔らかい。その端々に何かしらのたくらみがあるように思えてならないが、基本的に優しそう、というイメージが先行する。だが目の前の女生徒にはそれがまったくなく、というより180。正反対と言ったほうがいいだろう。現在怒っている性もあるのだろうが、その目つきは相当に鋭い。三枝が怒った

ときの目つきも鋭いが、これはそれ以上だろう。その目からは校長のような柔らかさはひとかけらも感じ取れなかった。

「誰、あんた？」

ゆえにこれは校長とはまったくの別人と結論付ける。人の性格というものは容易に変わるものではない。表情や目つきもまたしかりだ。表情というのは、性格というものの連動性が極めて高いのだ。短気な人の眉間にはよくしわが寄っていたり、逆にのんびりした人はどこか落ち着きが感じられるといった感じだ。片側がそう簡単に変わらない以上、連動するもう片方もそう簡単には変わらない。それが目の前のそっくりさんを校長と別人と断定した主だった理由だ。

「誰ですって!？」

しかし生徒はこの答えがお気に召さなかったらしい。それだけでなくも鋭かった目が、さらに鋭くなる。

「あなた、この学園の生徒でありながら私をしらないのですか!？」

「そりゃ全校生徒の一人一人を把握しろって方が無理な話だろう？」

「じのっ……!？」

この返答もお気に召さなかったらしい。なんだか肩をわなわなとふるわせているあたり、どうやらとても怒り心頭の様子だ。

「いいでしょう。それならば今この場でその脳に刻みつけなさい!」

女生徒は思いっきり息を吸うと、

「私はこの学園の生徒会長、夕凧リリア・ハーツです！！以後、覚えておきなさい！！」

ズビシツ！という効果音とともに指を突きつけてくる。自分の自己紹介の余韻に浸っているのか、生徒会長と名乗った女生徒は何も言っていない。

夕凧？

夕凧と言えば、校長と同じ姓だ。ということはやはり校長と何か関係があるのだろうか？容姿もそっくりだし、その可能性は高いのではなからうか。

「さあ、次はあなたの番ですわ！おとなしくクラスと名前を述べなさい！！」

さつきからやたら高圧的で命令口調なのが非常に気にかかるが、下手に刺激して余計なことになっても面倒だ。だからと言って、正直に聞かれたことに答えてしよっぴかれるのはもっと面倒だ。だとすれば、

「逃げるが勝ちってか？」

「え？」

すぐ横にあった窓を一瞬で開け、そこから身を投げ出す。後ろで生徒会長が何かを叫んだ気がしたが、落下の際の風圧で何も聞こえな

い。今俺が飛び降りたのは5回の廊下から、普通に着地すれば落ちるんタダでは済まない高さだが、

ふわっ…

着地の際に出るはずの音は起こらない。理由は単純、着地の際にかかる下向きのベクトルを今俺はうまく打ち消しただけ。地球に存在するあらゆるものには問答無用で重力がかかる。それゆえ人は常に下向きの力を受けているわけだが、その力は力を受ける物体が地面に接触しているかぎり常に一定だ。しかし、飛び降りるとなるとそれは変わってくる。

落下する物体には、毎秒 $9.8\text{ m/sec}^2$ の力がかかり続けるのだ。それゆえ落下する物体の落下速度どんどん上がり続ける。それは高さが高くなれば高くなるだけ早くなり、地面に接触する際の衝撃もあがるわけだが。今俺はその落下速度を地面に接触する際に、足のクッションで限りなく0に持っていたのだ。言うのは簡単だが、それは不可能の次元に等しい。足を曲げる角度、タイミング、筋の一本が少しでもタイミングをずらせば足への衝撃は大変なものになるのだから。

それでも自分はそれをこともなげにやってのける。何の問題もなしに。

まったくもって化けものだな。

半ば自嘲気味に自分が飛び降りた窓を見上げる。そこからは生徒会長が心配と驚きの混じった顔でこちらを見ていた。

俺はその場から急いで立ち去ることにする。これ以上の面倒は心から御免こうむりたい。

とりあえず三枝と合流するべく、自分の教室に向かうのだった。



## 第1章 6話

（第1章）

6話

今日の昼食はラーメンが食べたかった。そう思い、学食の券売機の前で意気揚々と財布を覗き込んだ俺につきつけられるたのは無情の2文字。

「ラーメン各種350円、あなたの財布には336円。漫画みたいな展開よね。どうせなら349円とかだともっと面白かったのに」

そんなふざけたことをのたまいながら、三枝はこれみよがしに味噌ラーメンをすすする。俺はといえば、学生の味方、安さにかけては追随を許さないとまで言われる一品、素うどんを食べている。くそ、なんだこの敗北感は。ちなみにお値段200円なり。

「私にだけ授業をうけさせて一人でとつとどつかに行くから罰があたったのよ」

「俺が受けてもしょうがない授業だろうが」

「それでも一緒に受けるのが男つてもものでしょ？」

どうやら三枝は一人で神崎の授業を受けたことがお気に召さなかったらしい。それに加えてその次の一般教養の授業までいなかったことも不機嫌に拍車をかけていた。

「だいたいね、なんで私があんなつまらない授業受けなきゃいけないのよ!? 理論がどうかこうとか言うけど、そんなのは実際に試すのが一番なのよ! あんなのに時間をとられるくらいならあんと戦闘訓練してた方がずっと有意義よ!」

そしてまたラーメンをすする三枝。そんなに勢いよくすすると汁が飛ぶ、というかすでに飛んでいる。お前がかかるならそれはそれでいいけど、こっちにまで被害が及ぶからやめてほしい限りである。

しかしお気楽なものだ。三枝にとっては戦闘訓練の方が有意義なのかもしれないが、俺にとってはいつこいつに危害を加えてしまうかわからない状況だというのに。知らないのだから仕方がないのだが、そんなことを思われているとなると少し困る。言っているだけならいいが、万が一実行に移されでもしたら……。しかも目の前のこいつならそれを平気でやりかねない。ここは神崎教諭にしっかりと三枝を抑え込んで授業を受けさせてもらう必要があるな。

「そっぴやなんか面白い発見でもあったか?」

「面白いつて何がよ」

自分でしゃべりたいことをしゃべったくせに、それを思い出したせいで余計に機嫌が悪くなったらしい三枝は眉間にしわを寄せながらこっちを見る。

「だから、お前に言わせればつまらない授業だったかもしれないが、何か新しい発見がなかったのかって聞いているんだ。大体お前の魔術って召喚なんだろう? それなのにまだお前が召喚できたのは剣の一本だけだ」

「私が無能だともいいたいわけ？」

「ねじ曲がった理解をするは止める。そうじゃなくて、なんか新しいことができそうなことは教えてもらわなかったのっかって聞いているんだ」

まったく、子供かこいつは。

「別に何もなかったわよ。なんか召喚魔術の歴史がどうか、保存空間からの喚起がどうか。半分以上聞き流してたから」

「お前な……」

「それにあの先生の専門は時空間魔術とか言ってたし。自分でも実際のところ召喚はよくわからないって言ってたしね」

それでいいのか神崎教諭。そこでふと思い出す。夕風校長の話では、確か神崎教諭が俺たちの担当になっているのは俺の存在によるところが大きいと言っていた。だとすれば専門外でもしょうがないところはあるのだろう。

「何よ？どうかしたわけ？」

「別に。ラーメンの汁服に飛んでるぞ」

「へ？あ~~~~~！いつの間にこんなに！？」

とりあえず三枝に俺が魔力をもっていないことは言わない方がいいのだろう。別に言ってもいいのかもしれないが、なんとなく説明がめ

んどくさい。俺は三枝が染みになりかけているラーメンの汁との格闘をしり目に、自分のうどんの汁を全部飲み干すのだった。

午後の授業はあつという間だった。なにやら黒板に数式が書かれていた気もするが気のせいだろう。目が覚めたらすでに窓の外はオレンジ色、つまりはすっかり寝倒してしまったというわけなのだ。

「誰もいやしねえ」

教室の中にはすでに誰の姿もない。もつとも現状、三枝以外のクラスメイトが話かけてくることはないので俺が寝ていたところで誰が気にすることもないのだろう。しかし三枝までもがシカトして帰りやがるとは。

いつまでもうだうだしていても仕方がない。座りながら長いこと寝ていたせいで体の節々がパキパキと嫌な音を立てる。校舎の中から出るころにはすでにあたりは夕闇に染まり始めていた。だいぶ日が長くなってきたとはいえまだ4月。夜の帳が下りるのは早い。一度空を見上げ、視線を前に戻す。

ヒュン

俺の顔に向かってくる何か。

一瞬の対応だった。

前方から飛んできた何かを間一髪でかわす。次の瞬間にはポケット

からナイフを取り出し、迎撃態勢に入ることができた。俺自身不意を突かれた攻撃に驚いたのだが、一番驚いたのはどうやら攻撃を仕掛けてきた側だったらしい。まさかかわされるとは思っていなかったのだらう。確かに死角からの完璧な攻撃だった。狙いも頭部という一撃で致命傷を負わずことできる箇所。一撃でやれなくても行動不能にはさせることができたはずなのだから。

しかし相手のその驚きもすぐになくなる。気持ち切り替えたのか、次々と何かを飛ばしてくる。だが、今度はそれを余裕を持ってよけることができた。飛んでくる何かの速度はそれほど早くないうえに軌道も直線的だ。これならば先ほどのように不意でもつかれないかぎり対応が遅れることはない。

「チツ…」

それも相手にとっては予想外だったらしく舌打ちが聞こえる。そこで俺はようやく相手の位置を知ることができた。飛んでくる何かから、相手がいるであろう方向はわかっていたのだがその姿までは確認できていなかった。しかし今の舌打ちで完璧に補足した。その音の大きさを距離を測定。おおよそ10メートル弱、十分射程距離圏内だ。

グツ…

身を低くし足に力込める。どうやら飛ばしている何かは無限ではないらしい。数十発に一度、攻撃が止む瞬間がある。時間にして1秒足らず。俺にとっては十分な時間。次にそれが訪れた時がこちらの攻撃の合図。

飛んでくる何かを紙一重でかわす。余計な動作を入れて態勢を崩さないようにする。そろそろのはずだ。ナイフを握る手にも力がこも

る。

ヒュン、ヒュン

まだ終わらない。今回は今までで最長の長さの攻撃だ。数十発で攻撃がやむと考えたのは早計すぎたのだろうか。そう思い、新たな攻撃手段を考え直そうとしたそのときだった。

ヒュン、……

止まった。それを合図に一気に切り込む。駆け寄るといっよりもほとんど飛びかかると言ったほうがいいかもしれない。相手との距離が縮まるのに1秒もかからない。攻撃はまだ始まらない。

殺れる

そう思った。だが俺のナイフが相手をとらえることはなかった。切り込んだその先に、すでに相手の姿はどこにも見受けられはしなかった。

確かに存在したであろうそれはどこにもいない。現状を認識したころには、すでにあたりは闇に染まりきっていた。

## 第1章 7話

（第1章）

### 第7話

翌朝、俺は早いうちに家を出ることにしていた。そのために昨夜は日付が変わらないうちに布団に入った。そのおかげか、いつもより1時間早く起きたのにも関わらず体がやたらと軽い。加えて天気もいいと来ている。

「これで早く学校に行く理由が調査じゃなければ最高なんだけどな……」

いつもと同じトーストとコーヒーの軽い朝食をとり家を後にする。正直、朝食なんかよりも早く学校に行きたかった。本当なら昨日の夜にそのまま調べたかったところだが、いかんせん周りが暗く、手持ちの装備で十分な光量を発するだけのものは持っていなかった。そういうわけで調査を今日の早朝に見送ったのである。

いつもと何の変わりもない通学路。一週間ほど前の入学式るときは満開だった桜は、春の風に吹かれすでに半分ほどになっている。あの時に感じていた期待感は今ではもうない。今あるのは漠然とした疑問。魔術という、その原理も何もあつたものではない存在そのもの。そして自分がここにいる意味。疑問を解消しようとしてまた新たな疑問にぶち当たる。ここ数日の自分は、まるで終わりのない螺旋階段を上っているような気がしていた。

校門をくぐると、すぐに自分の調査すべき場所が見える。昨日の下校中に何者かに奇襲を受けた場所。もしかすると襲ってきた相手

が隠蔽工作を図るのではないかと危惧もしていたのだがどうしやら杞憂にすぎたらしい。現場には昨日の奇襲の後がすっかり残っていた。

校門に向けて歩いていていた俺の背後側、つまり校舎の壁にくるずんだ後がいくつもついているのを見つける。近づいてよく調べてみると、それは黒いすすのようなまるで焦げたような痕。

「焦げた……」

通常すすが残るといっものは何かが燃焼したときだ。もちろん例外はあるが、昨日の攻撃により自分についたわずかな傷跡も熱傷によるものだということを考えれば相手が飛ばしてきた何かは、高温の何かだったという推測は間違っていないだろう。その後もまわりを調べてみたが特に何も見つかるものはなく、ちらほらと生徒が登校してきたところで調査は打ち切りとなった。

「高温の物体を飛ばす、ですか？」

「ああ、魔術にそういったものはあるのか？別に形あるものじゃやなくてもいい。要は人に熱傷を負わせるほどの熱をもった小型の何かを相当数射出するような魔術があるのか聞きたいんだが」

結局、個人的にかなり不服ではあったがこの結論にたどりつくほかなかった。熱をもった何かと結論はつけたが、現場にそれらしき物体は何も落ちてはいなかった。回収したとも考えられるが、だつたら壁についたすすをどうにかしないことに説明がつかない。それに決定的な要因は壁にすす以外に衝撃の後が見つからなかったことだ。飛んできたものが物体であったのなら、壁にぶつかった際に確実に傷ができる。1発や2発なら偶然で片づけることもできるが、数は



多数、速度も相当のもだった。そういうわけで、まだ完全に信じていない魔術なるものの可能性をあたることにしたのだ。

「そうですね……」

神崎教諭は手を口元にあて考えるしぐさを見せる。その容姿のせい  
か、そういった仕草がやたら様になっている。

「可能性はいくつかありますが、炎に起因する魔術と考えるのが妥当でしょう。ですが、一口に炎と言ってもいろいろあります。火炎放射気のように炎を扱う魔術もあれば、熱量の変化を扱うものなどその応用は様々です。魔術の中で炎というもの使用者は多いのも原因の一端ではありますが、一番の要因はその扱いやすさでしょう。それほど安定した術式は魔術の中でも類を見ませんから」

「御託はいらない。俺が聞きたいのはさっき言った通り。あるのかないのか、それだけだ」

「結論から言うのであればもちろんあります。今も言った通り、炎に関する魔術は多種多様ですから。よって、それだけの情報ではその魔術の詳しい詳細まではわかりません。これで満足ですか？」

俺は答える代りに神崎教諭の顔から視線をはずす。やれやれ、と言う声  
が聞こえた気がしたが無視をすることにした。

今の話からすると、昨日のあれは魔術による可能性が高いということになる。魔術を信じるかどうかはこの際置いておくとして、可能性が高いのであればそっちから考える方が妥当だろう。何よりも情報がないのでは話にならない。ただでさえ今回自分が襲われたはつきりとした理由がわからないのであれば尚更だ。

「それで、いつまで私を蚊帳の外に置いておく気かしら？せつかく気を使って黙ってたっていうのに、話が終わってからも無視とはい度胸じゃないの」

「入学式翌日を思い出すような凶悪な顔をした三枝がそこにいましたとき。これで満足か？」

「何だろう、この湧きあがる殺意は……。今ならためらいなく人が殺せる気がするわ」

「そうか、お疲れさん」

「あんたね〜！！」

ちなみに今の時間は魔術訓練の時間であり、当然最初から三枝は隣にいた。もっとも、三枝に事情を話すのは何かと面倒な気がするの  
で無しだ。神崎教諭に至っては質問はしたが、俺はこいつのことを  
まったく信用していない。ゆえに話す気など毛頭ない。

「何のことが教えなさいよ〜！！」

自分が何の事情も知らないのがよっぽど気に入らないのからしい。  
ここ一週間で三枝という人間性についてはそこそこわかった気がし  
ていたが、どうやら俺が考えていた以上に自己中心的な人間のよう  
だ。それはまるで小さい子供のような、

「おい、肩をつかむな。それから揺さぶるな」

「だったら早く教えなさいよ〜！！」

前言撤回、子供のようなではなく子供そのものだ。

人が人を殺す理由はいくつもある。怨恨・金銭トラブル・口封じ、その他あげればきりがないほどだ。そして加害者側の動機を他者が真に理解することなど不可能だ。だからこそこの世から殺人が消えることなどない。何をどうしても人が人を殺すという循環はなくなるらない。それはさながら無限に続く螺旋のように向かうところも見えずにただ続いていく。

だからこうして俺はここにいる。人と言うものは変わったつもりでいてもその根幹はかわることはない。だからこうしてここにいる。誰かを殺すために俺はここで待っている。

## 第1章 8話

（第1章）

8話

あたりが夜の闇に包まれてからすでに2時間。すでにまわりに人の気配はなくなり、背後の校舎の廊下が灯す最小限の光のみが光源になっている。結局今日の調査で有益な情報が得られなかったため、出来ればしたくないが待ち伏せという行為をとることにしたのだ。わざわざ学校にまで出向いて俺を襲ったあたりを考えても、相手はどうしても俺のことを殺したいらしい。それならば襲撃は1度では終わらず俺を殺すまで続くだろう。

「とは言ったものの、少しばかり腹が減った……」

おそらく今日も俺が校舎から出るところを監視でもしているだろうと踏んだ俺は、昇降口からではなく窓から外へ出て、昇降口が見えるところに身をひそめることにしたのだ。いつまでも出てこない俺にしびれを切らした犯人が様子を見に姿を現さないかと思っただけが、どうやらあてが外れたらしい。もつとも、仮にも誰かを殺そうとしている奴がそんな手にかかるとも思えはしない。

それからさらに1時間たったところでさすがに待ち伏せは断念することにした。何より腹が減った。時計を見ればすでに9時を回っている。改めて考えてみればなんともバカなことをしている。自分の浅はかさには思わずため息を吐いたとき、どこから何かの音が聞こえた。自慢するわけではないが俺は聴力が相当いい。視力や味覚などの感覚器官が常人よりも遥かに優れている。

それがいいのか悪いのかはわからないが、少なくともこの場ではよ

かったといえるだろう。

音はどうやら旧校舎の方からのようだ。気配を殺し音を一切たてずに近づいていく。現在、旧校舎の周りには関係者以外の生徒が入らないようによく工事現場などで使われている柵のようなものに取り囲まれている。なんでも近々改装工事を行うと朝のHRで神崎教諭が言っていた気もするが、連絡事項を右から左に聞き流しているせいか工事をするという事実だけで詳しい詳細を脳内からとりだすことだ出来なかった。そのため昼間は工事関係者が出入りしているのを見かけたことはあるが、この時間にはとつくに全員仕事を終えているはずで中から物音が聞こえてくるはずなどないのだ。

## カツン

旧校舎の廊下を歩く音だろうか、やはり誰かが中にいるのは間違いないようだ。すでに照明機器の類は取り外され、電力の供給が無くなっていく旧校舎は闇に包まれている。

中にいるのだけは誰なのだろうか？

案に考えるのなら工事関係者が忘れ物を取りに来たと考えるのが一番なのかもしれない。だが、昨日の襲撃の後ではさすがにそう安直な考を受け入れることは困難だった。昨日のことも踏まえて装備の方は問題はない。それに誰が侵入しているにせよ俺の存在に気付いているとは思えない。忘れ物を取りに来ただけのやつが気配を殺した俺に気付くとは思えないし、何らかの目的があつてきた奴であれば誰かがいるのを承知でことを起こそうとは思わないだろう。そもそも誰もいなくなった夜の学校に侵入している時点であまりいいことをしようとしているとは思えないのだから。

相手の不意を突くにも様子を見るにも、とにかくその目標を補足しないことには意味がない。そう思い旧校舎に俺も侵入しようとしたそのときだった。

「そこで何をしているのですか!」

いつかに同じようなことがあった気がしなくてもない。それもつい最近に。

「ここは立ち入り禁止区域です。どこの誰なのかは知りませんが大人しく私についてきてもらいますわ!抵抗するようでしたら容赦はしませんので」

振り返れば奴がいる。という冗談は置いておくとして、そこには赤髪縦ロールの女生徒が立っていた。その容姿はそう簡単に忘れるはずもない。何より初対面のインパクトが大きい。三枝とは別のベクトルの方向でめんどくさい相手だ。

「大体、すでに下校時刻から何時間過ぎていると思っっているんですの!?!その征服からして我が校の生徒のようですが、だからといってこんな時間まで校内にいることは許されていませんわ!まして立ち入り禁止区域で」

赤髪縦ロール、ではなく生徒会長はそのままご丁寧にも説教をはじめてくれた。しかしあたりの暗さのせいか、どうやら俺の顔を判別するには至っていないらしい。それとも見えてはいるが俺のような一生徒の顔など覚えていないのかもしれない。どちらにもしてもちらにとっては好都合なのは変わりない。対襲撃者用の装備だったがいしたしかたない。ここで捕まって余計な詮索をされるよりかははるかにましだろう。俺はさりげなくポケットの中に手をいれ、その

中にあるものを地面に落としたりした。

「そもそもここが立ち入り禁止になっているのは、っえ!？」

瞬間、今まで一面の暗闇だった場所が途端に閃光に包まれる。明るい場所でも目がくらむであろう光量だ。それが暗闇だった場所できなり見ることになれば、短くても数分間は正常に物を見ることは不可能だろう。

「な、なんですの!？目が、見えませんわ!！」

生徒会長には悪いがしばらく見えない目でいてただこう。光の量はしっかり計算してあるので、目に異常がでることはまずないだろう。俺は前回と同じように生徒会長のそばから足早に退却し、おとなしく帰宅することにした。

だがこのとき俺はミスをおかしていた。それも重大なミスを。あの閃光は近くから見れば強烈だが、ある程度距離が離れていればそれは暗闇を照らす光にしかない。

俺は旧校舎からこちらを見ていた誰かに気付くことが出来なかったのだ。

## 第1章 9話

（第1章）

### 9話

旧校舎の一件から早1週間がたとうとしていた。その間特に誰かからの襲撃があるわけでもなく、奇妙な事件が起こったわけでもない。強いて言うなら三枝がやたらと俺が何かを調べていることに興味をしめしていることくらいだろうか。とにかくこの1週間は平和そのものだったと言える。

「で、あんた一体何隠してるのよ？」

「だから俺は何も隠してないし、何も調べてないって言うてるだろうが。お前に耳はついてるのか？」

「そんな言い訳が私に通じると思ってるわけ！？無駄よ無駄。さっさと吐いちゃいなさい、そしたら楽にしてあげるから」

こいつは一体何をどう楽にするつもりなのだろうか。なんとなく俺の肉体的負荷が容易に想像できるのは入学以来こいつと行動を共にしている弊害か。だとしたらなんと嫌なことだ。それにしても、三枝を見る。いつものように無駄に人を威嚇するような目でこっちを見ているが、洞察力は相当のものらしい。俺とて三枝はもちろんのことだが、神崎教諭をはじめ、誰にも俺が何かを調べていることがばれないように慎重をきしてきたつもりだ。もちろんそれが完璧だったと言いきるわけではないが、そんなに簡単にはばれるようなはずはないはず。



「なあ、お前はなんで俺が何かを隠してると思うんだ？別にこれと  
いって何か特別なことをしてるつもりはないんだが？」

基本的に校内ではほとんど三枝と一緒にいることが多い。お互い友  
達がいらないということもあるが、どういうわけか俺も三枝も極力二  
人であることを選択している。それゆえ一緒にいるときに何かを調  
べるようなことはもちろんしないし、わざわざ夜中に学校に赴いて  
一人で調査を行っているくらいなのだ。むしろばれる方がおかし  
い。しかし、三枝にとってそんなものはさしたることじゃなかったら  
しい。その証拠にその顔はさっきまでの威嚇に加えて呆れまで入っ  
てきている。

「あんた本気でそんなこと聞いているわけ？そんなの目をみればぐ  
わかるのよ！あんたの目には明らかに何かを隠している人間特有  
のものがある。うまく説明できないけど私の経験上、そういう目を  
してる人間はいいことにしろ悪いことにしろ何かを隠してるもんだ  
わ！！」

なるほど。

目は口ほどに物を言う。昔の人はうまいことをいったものだ。三枝  
の言っていることには何の根拠もなく、言ってみればただの勘だ。  
だが俺にしてみればそれは下手な説明よりもよっぽど納得してしま  
うものになる。目というものはその人物の考えていることが出てし  
まう個所として代表格な部位。実際、簡易的な嘘を見破る手段とし  
ても相手の目を見ながらの質問と言つのは行われている。もっとも  
その変化は極わずかなものであり、普通の人々がそれを感じ取るの  
はほぼ不可能と言ってもいい。だが、稀に類稀なる洞察力と観察力  
でそれを感じ取る人間がいる。

「こいつもそう言う人種なわけか……」

「意味分かんないこと言っただけでちゃきちゃきしゃべりなさい！  
！ちなみに拒否権なんかないから」

と、感心している場合ではない。この場をどうやって凌ぐか、それが問題だ。いつそのこと話してしまっただけで調査を手伝ってもらうのも一手かもしれない。そのほうが作業効率もあがるし、なにより夜にわざわざ学校に出張する必要もなくなる。

しかしだ、

今回は相手が悪い。何しろいきなり不意を突いて襲ってくるような奴が相手だ。俺一人ならまだしも、三枝まで守ってやれる自信は無い。何よりも相手がこちらに対してなんら躊躇することなく攻撃してきていることから考えても、三枝に話すのは止めた方が賢明だろう。

「何、間抜けな顔して呆けるのよ！！ついに言葉も忘れちゃったの！？そんなんだったら鶏のほうがまだましよ、養鶏所にでも行って鶏に謝ってくるといいわ！！」

なぜに鶏に謝るのは知らないが、三枝の追及を逃れる手段が浮かばない。この場を凌ぐだけなら逃げるのもいいが、さっきも言ったがこの学校で俺が話す相手は三枝しかいないし相手も同じ。次に会ったときに烈火のごとく詰め寄られるのは目に見えている。

どうしたらいいものか……

「仲がいいのは構いませんが、もう少し周りの迷惑というものを考えるべきだと思いますが？」

どうやらそんな風に頭をひねる俺を神は見離さなかったらしい。もっともそんなものは信じちゃいないが、このときだけは感謝してもいいかもしれない。

「先ほどから他の人たちが迷惑そうにあなた方を見ているのに気づいてなかったんですか？」

振り返れば神崎教諭がそこにいた。ちなみに言い忘れていたが、今俺たちがいるのは食堂であり、現在昼休み真っただ中。まわりには俺たちと同じく昼食を取りに来ている生徒が多数。そして俺たちを見る冷たい視線がさらに多数。

ぬかったぜ……

「別に周りなんて関係ないわよ！文句があるなら言ってくればいいんだわ！何のために口がついてると思ってるわけ!？」

なんとも自分勝手な意見なのに、こいつが言うと言説力があるように思えるのはなぜだろう。実に不思議なものである。

「それでなんであんたがここにいるわけ？私たちに何か用事でもあるの?？」

教師に対しての口のきき方ではないが、俺も人のことは言えないし言うつもりもないのでスルーしておく。対する神崎教諭はと言えば、こちらも特にそれを気にした様子もなくいつものように冷静かつ無表情。そしてそのままとんでもないことを言い放ってくれ

た。

「別にあなた方に用があったわけではありませんが……、そうですね、ここはあなた方にも手伝ってもらいましょうか」

「手伝うって何をよ？めんどくさいのは嫌よ」

本当にこいつはなんというか、ここまで自己中心的を究めれば世の中もさぞ楽しかろう。

「たいしたことではありません。校内に侵入者が入ったようなので、その捜索を手伝ってもらおうかと思ひまして」

実際、相当対したことだと思ふのだが、もはや突っ込むのは野暮と言つものだろう。俺が何と言おうと、三枝のやつが目を輝かせ始めた時点でその後の行動は決まってしまうのだから。

まあ、三枝の追及を逃れられただけよしとしよう。

## 第1章 10話

〔第1章〕

10話

校内に侵入者が入ったからという神崎教諭の一言により、その捜索にあたることになった俺と三枝だったわけだが、結果を言ってみれば俺達ができることなんて何もなかった。

俺達が捜索をはじめて2分後にはすでに侵入者は捕まったらしく、現場にたどりついたころには周りを風紀委員が囲んでいたため近づくことすらできない状態だったというわけだ。

俺としては三枝からの追及を逃れることができ、その上面倒なこともなくなったわけで万々歳のだが、もちろんもう一人はそんなわけはない。

「何考えてるわけあの侵入者は！！もつと根性入れて逃げなさいよね！！」

それはどうかと思うが今回も突っ込むことは止めておく。この状態の三枝は放っておくのが一番であり、無駄にかまえばこちらに被害が及ぶ異なる。藪をつついて蛇を出すような真似は御免こうむるところだ。

「風紀委員だか何だかしらないけどあいづらも邪魔なのよ！！みんなして私の邪魔ばかりして、別に犯人がどんな奴化くらい見たいいいじゃないの！！」

この学校が魔術学校である以上、その力を使って何かと悪さをしよ

うとするやつらが出てくるのは道理。それゆえそれを監視し、時には処罰するものがいなければならぬのは当然のこと。現在、月影学院その役目を担っているのは今三枝が言っていた風紀委員というわけだ。生徒により成る集団ではあるが、職務が職務だけにその実力は他の一般生徒とは隔絶した力を持っている。

だから風紀委員というのはほとんどの生徒が憧れを抱く役職でもあり、その実力ゆえ恐れられる存在でもあるのだ。もうひとつ似たような役職として生徒会があるのだが、まあ、ここではその話はいいだろう。というか流石にそろそろ三枝を止めないとこのままの勢いで風紀委員に突撃していきそうだ。

「そろそろ落ち着けよ。いまさらあだこうだ言っても無駄でしかないだろう?」

「無駄とかそういう問題じゃないのよ!!今ここで問題なのは私の邪魔をしたということなの!!私のじゃまをするなんて、たとえそれが神であっても許されない行為だわ!!」

神すらダメとか、お前はどれだけ高いところにいるんだよ。いち女子高生に劣るとか、安くなっただなあ神。

「なんとかして侵入した方法だけでも聞き出せないかしら?」

未だに諦めを見せない三枝はまだそんなことを言っている。だから諦めると言っているだろう……に……

「おい三枝、侵入した方法ってどういうことだ?普通に門から入ってくるなり塀を乗り越えるなりしたんじゃないのか?」

「はあ!?あんた頭沸いてんじゃないの?この前神崎が言ってたじ

やない。この学校は魔術と言う、一般の常識からは考えられないものを使うから、対侵入者には神経使ってるって」

まったくもって初耳である。そのとき俺はいたのだろうか？

「そういえばあんたいなかった気がするわね。私にだけ授業を受けさせるからそういうことになるのよ！まあいいわ。なんでも学校の敷地を取り囲むように結界みたいなものが張ってあって、許可なくそこを通ると反応する仕組みになってるみたいね。教職員や生徒、並びに学校関係者はあらかじめスルーされるように設定されているから問題はなし。とにかく関係ない人が校内に入るためには、事前にアポを取った上でさらに手続きを必要とするみたいよ？」

「つまり、無断で入れればすぐにばれると？」

「みたいね。誰かが侵入したとわかれば今日みたいに捕まるまでは秘密裏に搜索が始まるわ。その搜索には風紀委員と手の空いている教師があたり、見つけ次第問答無用で捕獲」

「おひとり物みたいだな……」

「それだけデリケートな問題だっことでしよう。一般の世界に魔術なんてものが知れ渡ればそれこそ大問題。すぐさまあちこちでいざこざが起こり、最終的には魔術師を根絶する動きになるのが目に見えてるってことね。だからこそ魔術師はその秘密を外部にもらさない。そうやって昔からずっとバランスを保ってきたのよ。まあ、もっとも今のは全部神崎の受け売りだけどね」

そう言っつて三枝は肩をすくめて見せる。どうやら風紀委員への理不尽な怒りは俺に説明をしているうちに多少は収まってきたらしい。

未だに名残惜しそうに現場に視線を飛ばしはするが、もう突撃しようという気配は感じられない。数秒後には三枝の興味はそばにあった自販機の中身に移ったようだった。

しかし今聞いた情報、こちらとしては大きな収穫であり、さらなる問題を生み出してくれるものでもあった。

「なあ、三枝……」

「ん、何よ？言っとくけどこのリンゴジュースはあげないわよ？」

「そんなものはいらん。そんなことよりさっきの話だけどさ、外部のやつは絶対に校内に無断で入ることは不可能なのか？」

「あんたは何が言いたいわけ？私の説明ちゃんと聞いてた？」

だからそんなかわいそうなものを見るような眼でこっちを見るなど言うんだ。それからなんでリンゴジュースなんだ？お前の印象的にそんな可愛いものを飲んでちゃいかなだろう。もっとも俺の偏見であるわけだがそんなことは言つつもりはない。言った瞬間に飲む缶が飛んできそうだった。

「いいから答えるよ。無断で入ることは完璧に不可能なのかどうなのか」

「別に不可能じゃないんじゃない？抜け道の類もいくつかあるみたいだし」

「抜け道？」



「そ、抜け道。どんなに高度なセキュリティを持っているところだとしても穴のないものなんてこの世にはないでしょう？それを構築しているのが人である以上、どこかにミスは生じるもの。なんでもこの学校を取り囲む結界みたいなやつにも穴はある。もっともそれを見つけるのは相当困難で、のかつ知っている人なんて生徒会の人間とか風紀委員でも幹部クラスのさらにごく一部。教師でも知っている人はあんまりいないみたいよ？」

それでも知る人はいる。そして無許可で忍び込むことも可能である。この二つは俺がここ1週間調べて得た事実のどれよりも有益であることに間違いはない。

「ところで三枝、お前はそれをどこで聞いたんだ？」

最初の説明は神崎に聞いたと言っていたが、後半の説明はいくらなんでも神崎が話したとは思えない。具体的な場所を知らないとはいえ、それを知っていること自体かなりの情報となりえるからだ。入学したての一生徒にそんなことをペラペラしゃべるとは到底考えにくいだろう。

そう思ったのだが、三枝はそれにつまらなそうに首を振りこともなげに答える。

「なんか面白そうだったから校長に聞いてみたのよ。そしたらすぐに応えてくれたわよ？さすがにその場所までは教えてくれなかったけど、あんまり簡単に教えてくれちゃうもんだから、こっちが拍子抜けしたくらいよ」

三枝は空になつたらしい、ジュースの缶を乱暴にゴミ箱に投げ入れる。

「さてと、もうここにも用はないしそろそろ行くわよ」

言うが早いかすでに踵をかえして歩き始める。俺もそれに黙って習うことにする。しかし校長、そんな情報簡単にしゃべっていいもんじゃないだろう。

それでも校長には感謝すべきなのだろうか。とにもかくにもこれで今日からの活動方針がきまったのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0449e/>

---

Chain

2010年10月11日23時17分発行